日本語とアジア諸言語との対照的研究

— テンスとアスペクト —

1991—1992年度科学研究費報告書
一般研究（B）　課題番号　03451065
研究代表者　鈴木重幸　（横浜国立大学）

１９９３年３月

工　藤　真由美　（横浜国立大学）
森　口　恒　一　（横浜国立大学）
生　越　直　樹　（横浜国立大学／
国立国語研究所）

.1
3478391
横浜国立大学

１９９１－１９９２年度科学研究費報告書

研究科目　一般研究（Ｂ）　課題番号　０３４５１０６５

課題番号　０３４５１０６５

研究課題　日本語とアジア諸言語との対照研究

——　テンス・アスペクト　——

研究経費　１９９１年度　３５０万円

１９９２年度　８０万円

研究代表者　鈴木重幸　（横浜国立大学）

研究分担者　工藤真由美　（横浜国立大学）

森口恒一　（横浜国立大学）

水野義道　（京都工業繊維大学）

生越直樹　（横浜国立大学／国立国語研究所）

810.1
SV

日本語とアジア諸言語との対照的研究

— テンスとアスペクト —

1991—1992年度科学研究費報告書
一般研究（B）　課題番号　03451065
研究代表者　鈴木重幸　(横浜国立大学)

3478391

横浜国立大学

１９９３年３月

工　藤　真由美　(横浜国立大学)
森　口　恒　一　(横浜国立大学)
生　越　直　樹　(横浜国立大学／
国立国語研究所)

目　次

刊行にあたって　　鈴木重幸

Ｉ．　工藤真由美：　テンスとテンポラリティー　・・・・・・　7

ＩＩ．　工藤真由美：　現代日本語における
過去の出来事の表現　（その２）　・・　３９

ＩＩＩ．　森口恒一　：　タガログ語のアスペクト　・・・・・・・　５３

ＩＶ．　生越直樹　：　朝鮮語における過去の出来事を
表す表現　・・・・・・・　９７

報告書刊行にあたって

わたしたちは１９９１年度～１９９２年度の２年間《日本語とアジア諸言語との対照的研究―テンスとアスペクト―》というテーマで文部省の科学研究費補助金をうけた（課題番号 03451065）。メンバーと分担はつぎのとおりである。

鈴木重幸　（代表）総括
工藤真由美　日本語
森口恒一　タガログ語
生越直樹　朝鮮語
水野義道　中国語

このうち生越は途中で国立国語研究所に転勤したので、２年目は正式のメンバーからぬけたが、実質的には研究に参加した。

この報告書はこのテーマにかかわる工藤真由美，森口恒一，生越直樹の研究成果の一部をまとめたものである。水野義道の成果は、この報告書には間に合わなかった。ちかいうちに京都工業繊維大学の紀要等に発表される予定である。報告書をまとめるにあたって、とくに内容的な統一は はからなかったが、過去の出来事がそれぞれの言語においてどのような表現手段によってあらわされているかということには、各自ふれることとした。

最初の論文 工藤真由美「テンスとテンポラリティー」は単語レベルの動詞の形態論的なカテゴリーとしてのテンスのほかに、文レベルの出来事の時間的な位置づけ＝時間表示に関わる機能・意味的なカテゴリーとして《テンポラリティー》という概念を導入し、日本語を例にして、テンポラリティーの体系（意味とそれの形態論的な，語彙的な表現手段等）、他の同レベルのモダリティー、アスペクチュアリティーとの関係、テキストのタイプとの関係等を論じたものである。日本語や朝鮮語のようなテンスをもつ言語においても、中国語やタガログ語のような、一般にテンスをもたないとされている言語にもテンポラリティーは存在する。すべての言語に存在するテンポラリティー、アスペクチュアリティー等の概念は、対照的研究という、今回のわれわれの研究テーマにとって、重要な意味をもって

いる。

第２の論文 工藤真由美「現代日本語における過去の出来事の表現 その２ ―会話文の歴史的現在用法を中心に―」は、工藤1991「過去の出来事の表現―テンス・アスペクト体系とその機能―」（『横浜国立大学国語研究』９）をうけてかかれたものである。先行する論文では、過去の出来事の表現手段としてシタ、シテイタ、シテイル（パーフェクト）のほかに、転移用法としてスル、シテイル（継続）がもちいられていて、それぞれの使い分けはテキスト（ディスコース）のタイプと相関している、ということが論じられているが、今回の論文（その２）では、会話文における非過去形の転移用法がとりあげられている。小説の地の文については

工藤真由美1993a「小説の地の文のテンポラリティー」（『ことばの科学 ６』むぎ書房、近刊）

でとりあげられているので、参照されたい。さらに、関連する論文として

工藤真由美1993b「現代日本語の時間の従属複文」（横浜国立大学人文紀要第二類 ３９集、近刊）

がある。

第３の論文 森口恒一「タガログ語のアスペクト」は、タガログ語のアスペクトを、それと関連する現象とともに、とりあげている。タガログ語には、フォーカスとよばれる現象があって、おおまかにいえば、主格、目的格、その他のいろいろな格の名詞を主題としてとりたてるさいに、その、主題化された名詞の格関係を表示するために、動詞が語形変化する。タガログ語では、〈完了〉〈未完了〉〈未来〉とよばれる３つの形がアスペクトとみとめられているが、そのアスペクトの形がフォーカスの変化とからみあっている。この論文では、フォーカスとからめて、アスペクトの形をあげる。テンスのカテゴリーはないので、アスペクトの形、および時間にかかわる小詞（〈まだ〉〈もう〉のような）、時間副詞（〈きょう〉〈きのう〉〈あした〉のような）、時間的な従属文などによって時間が表現されることが例示されている。なお、タガログ語については、森口恒一1985『ピリピノ語（タガログ語）文法』（大学書林）などを参照されたい。

第４の論文 生越直樹「朝鮮語における過去の出来事を表す表現」は第１の論文で工藤のいう、過去のテンポラリティーをとりあげ、朝鮮語における、形態論的な表現手段として、述語になる用言の形態を列挙し、それぞれの形態のあらわす時間的な意味特徴を、アスペクチュアルな、モーダルな意味特徴などと関連させて解説したものである。過去を表現する、終止的な用言の、中心的な形態としては었'əss形があるが、ここでは、このほかに、었었'əss'əss形、더də形、 었더'əssdə形、および非過去形がとりあげられている。

１９９３年３月

代表　鈴木重幸

テンスとテンポラリティー

工藤真由美

Ⅰ．1　テンポラリティーの表現形式
Ⅰ．2　テンポラリティーの表現内容
Ⅱ．1　テンポラリティーとモダリティー、アスペクチュアリティー
Ⅱ．2　テンポラリティーと間接話法
Ⅱ．3　テンスと時間副詞の機能分担
Ⅲ　テンポラリティーとテクストのタイプ

Ⅰ．1　テンポラリティーの表現形式

文によってある出来事を伝えようとする場合、その出来事の成立時間をなんらかのかたちで示す必要が生じうるが、この文レベルの＜出来事の時間的位置づけ＝時間指示（time reference)＞に関わる機能・意味的カテゴリーを＜テンポラリティー＞とよんでおこう。このテンポラリティーのない言語は考えられないが、テンポラリティーの１つの表現手段としての文法的（形態論的）テンスのない言語はありうる。例えば、次の中国語と日本語を比較すれば、

彼は去年ここで働いた。　　他去年在这里工作
彼は来年ここで働く。　　他明年在这里工作

日本語は、形態論的・義務的なカテゴリーとしてのテンスと語彙的・任意的なものとしての時間副詞という、２つのテンポラリティーの表現手段があるが、中国語には（決定的なかたちでは）テンス対立が存在せず、テンポラリティーの（主要な）表現手段は語彙的なものである。

おそらくテンポラリティーの表現手段として、文法的（形態論的）なものと語彙的なものという２つのプロトタイプを認めておくことができよう。

テンポラリティー
- 文法的（形態論的）　テンス
- 語彙的

文法性のプロトタイプのパラメーターとしては、次の点が考えられるが、

①義務性
②包括性（あらゆる動詞あるいは述語形式をまきこんでいること）
③規則性・総合性<syntheticality>（一様で総合的な形式的指標の存在）
④抽象性・一般性（語彙的意味からの解放）

言語によっては、語彙性を残した時間小詞（particles of time)、義務的ではあるが分析的な時間の助動詞等があって、文法的なものと語彙的なものとは連続的であり、文法化の程度差を考慮にいれておかなければならないであろう。

だが、現代日本語においては、典型的なかたちで、テンスと時間副詞（名詞）が存在している。

テンポラリティー
- テンス＜文法的・義務的＞　ｱﾙｸｰｱﾙｲﾀ　ｱﾙｲﾃｲﾙｰｱﾙｲﾃｲﾀ
  ｻﾑｲｰｻﾑｶｯﾀ　ｼｽﾞｶﾀﾞｰｼｽﾞｶﾀﾞｯﾀ
  ﾋﾞｮｳｷﾀﾞｰﾋﾞｮｳｷﾀﾞｯﾀ
- 時間副詞＜語彙的・任意的＞　ｻｯｷｰｲﾏｰｲﾏﾆ
  ｷｮﾈﾝｰｺﾄｼｰﾗｲﾈﾝ
  ｾﾞﾝｼﾞﾂｰﾄｳｼﾞﾂｰﾖｸｼﾞﾂ

そしてテンス体系は＜過去－非過去＞の２極対立である。言語によっては３極対立さらには４極対立の場合もありうるであろう。

このように、基本的に普遍的カテゴリーである機能・意味的カテゴリーとしての＜テンポラリティー＞と、存在の有無が言語ごとに異なる文法的カテゴリーとしての＜テンス＞とを区別しておくことは、言語間の対照的研究を行なうにあたっての必要条件である。現代日本語におけるように、テンポラリティーの表現手段としての文法的テンスが存在している場合には、その義務性、包括性によって、テンスがテンポラリティー（出来事の時間的位置づけ）の核＝中心となるであろう。が、文法的表現手段が存在しなくても、語彙的表現手段が存在していれば、出来事の時間的位置づけ＝時間指示ができるとすれば、おそらくテンポラリティーの表現手段としての語彙的形式の存在は、普遍的であろう。

これまで、テンス、アスペクトという用語は、様々な表現手段を含む機能・意味的カテゴリーをさして広義にも、文法的表現形式に限定した形態論的カテゴリーをさして狭義にも、使用されてきている。が、文法的表現手段をもたない言語をも含んでの対照的研究を行なうにあたっては、前者をテンポラリティー、アスペクチュアリティー、後者をテンス、アスペクトとよんで、区別しておく必要があろう。従って、ごくおおざっぱではあるが、次のような対照的研究の手順が必要になってくると思われる。

①言語間に共通する意味・機能的領域の設定

出来事の時間的位置づけに関わるテンポラリティー

出来事の時間的展開に関わるアスペクチュアリティー

②言語ごとの文法的（形態論的）カテゴリーの有無の確認

形態論的カテゴリーとしてのテンスの有無

形態論的カテゴリーとしてのアスペクトの有無

（文法的＝形態論的カテゴリーの認定の基準の問題の追求を含む）

（文法的対立のあり方の確認・記述を含む）

③形態論的カテゴリーのない言語における他の表現手段（語彙的、構文的等）の確認・記述

形態論的カテゴリーのある言語における他の表現手段の確認・記述および両

者の関係性の追求

④意味・機能的カテゴリーの内部構造（形式面・内容面）の比較・対照

本稿においては、以上のことを視野にいれて、現代日本語におけるテンポラリティーの核をなすテンスと、他の表現手段＝語彙的な時間副詞とが、どのようなかたちでテンポラリティーの構造化をおこなっているかを考えていってみたい。

Ⅱ．２　テンポラリティーの表現内容

さて次に、テンポラリティーの表現内容面についてであるが、おそらく次の３つのパラメーターが考えられる。

①時間の基準軸（time axis, time locas）
　　発話時基準、発話の内容時基準、歴史上の出来事時基準
②時間の方向（time vector, direction in time）
　　以前－同時－以後
③時間の隔たり量（remoteness, distance in time）
　　基準軸からの時間的隔たり量（隔たり量の単位）

第１に、時間の基準軸をどこに置くかの問題。発話時を基準軸とするものを絶対的テンポラリティー（absolute time reference）、発話の内容時を基準軸とするものを相対的テンポラリティー（relative time reference）、キリスト誕生あるいは天皇即位のような歴史的出来事を基準軸とするものを暦法的テンポラリティー（calendrical time reference, chronological time reference）とよんでおこう。現代日本語においては次のようになっている。

まず、文法的テンスは、最も基本的な主文、単文において、発話時を基準軸とする絶対的テンス対立であり、＜終止＞の位置において相対的テンス対立となることはない。（ただし小説の地の文のような「かたり」のテクストにおいて、文体的技巧としてのメタフォリカルな相対的テンス化はある。この点についての詳

細は工藤1993参照）が、従属文（非終止の位置）においては、主文の出来事時を基準軸とする相対的テンス対立となる。従って、次のように同じ時間指示（time reference)をもつ出来事が、終止の位置と非終止の位置では、発話時と主文の出来事時のどちらを基準軸にするかによって、異なるテンス形式で表現されることになる。

・「昨日友達と映画を見に行ったよ」　　〈絶対的ﾃﾝｽ=発話時以前〉
「お母さんにちゃんと友達同志で行くことを断ってから出掛けましたか」
〈相対的ﾃﾝｽ=主文の出来事時以後〉

・「これから友達と映画を見に行くよ」　　〈絶対的ﾃﾝｽ=発話時以後〉
「明日先生に友達同志で映画に行ったことを報告しなさいよ」
〈相対的ﾃﾝｽ=主文の出来事時以前〉

・「あ、お姉ちゃんがお酒飲んでる！」　　＜絶対的ﾃﾝｽ=発話時同時〉
「お酒飲んでたこと、お母さんに言い付けるんじゃないわよ」
〈相対的ﾃﾝｽ=主文の出来事時以前〉

・「さっきお姉ちゃんがお酒飲んでたよ」　　〈絶対的ﾃﾝｽ=発話時以前〉
「どうして、お酒飲んでることを教えてくれなかったの。すぐやめさせたのに」　　〈相対的ﾃﾝｽ=主文の出来事時同時〉

以上のように、現代日本語においては、絶対的テンスと相対的テンスは形式上分化＝対立していず、従属化の有無（構文的条件）が決めることになる。ただし構文的従属化による相対的テンス化は義務的ではなく、特に次のように＜同時性＞の場合は、相対的テンス的にも絶対的テンス的にも表現される場合が多い。

＜同時性の場合＞

・「さっきはお客さんが来ていることを知らなかったの。騒いでごめんなさい」　　＜＝来ていた＞

・「京都にいる間は、ずっと晴天でした。」

＜＝いた＞

・「先月高知に行く時は、船をつかいました」

＜＝行った＞

＜非同時性の場合＞

・「昨日は、お客さんが午後来ることを知らなかったの。掃除しなくてごめんなさい」　＜≠来た＞

・「１月ほど京都にいた後、大阪に行きます。」

＜≠いる＞

一方、語彙的なもの＝時間副詞（名詞）においては、絶対的テンポラリティーと相対的テンポラリティーが形式上、分化＝対立している。

絶対的テンポラリティー （絶対的時間副詞）	相対的テンポラリティー （相対的時間副詞）
いまに、このあと、今後、ちかぢか あした（あさって）、来週（さ来週） 来月（さ来月）、来年（さ来年）	そのあと 翌日（翌々日）、翌週、翌月、 翌年
いまごろ、現在、目下 いま きょう、今週、今月、ことし けさ、今夜（今晩） ちかごろ、このごろ、最近	そのとき そのひ（当日）、その週、 そのつき、そのとし、 そのあさ、そのよ そのころ
いましがた、さっき、このあいだ、 このまえ	そのまえ まえのひ（前日）、まえの週、

きのう（おとつい）、先週、先月、 去年（おととし）、ゆうべ あのとき、あのころ、あのひ、 あのとし、当時	まえのとし（前年）、 まえのよる（前夜）

絶対的時間副詞は常に発話時を基準軸とするものであり、＜発話時以後＞＜発話時を含む時間帯＞＜発話時以前＞を表すものに大きくは分かれる。一方、相対的時間副詞は、次のように、基準軸となる発話内容時は、①過去の一定時、②未来の一定時、③不特定時の場合というバリアントがあるが、すべて発話時ならぬ出来事時を基準軸とする点で共通している。

①京都に出掛けた日は雨でしたが、翌日は晴れました。
　１０時頃殺人事件がありましたが、あなたはその時どこにいたのですか。
　　前日配られたチケットをなくしてしまったので、中に入れなかったの。

②翌日授業があるので、公開講演会にだけ出席する予定です。
　３月に向こうの方が来られます。そのとき、お返事しましょう。
　今度注射がありますが、申し込み用紙は前日配ります。

③日本酒を飲むと翌日必ず頭が痛くなる。
　本校の規則では、試験当日の学生証交付は行なわない。
　当店では、前日に作ったものをお客さまにお出しするようなことは致しません。

従って、次のように、絶対的時間副詞と相対的時間副詞のどちらを使うかで、出来事の時間的位置づけは全く変わってしまう。

・来週の日曜日は都合が悪いので、明日伺います。

翌日

・コンサートのチケットをまだもらってない人は、今日受け取って下さい。

当日

・授業中居眠りをしてしまったわ。昨日徹夜したのよ。

前日

そして、テンス形式のように、従属化によって、絶対的時間副詞が相対化することはない。次の例の＊は非文法的であることを示す。（ただし、小説の地の文のような「かたり」のテクストにおいては、相対化が頻繁におこる。この点については後述）

・＊昨日もらった用紙をなくしてしまって、あの日はすっかりあせってしまいました。
＜前日＞

・＊私は居間にいましたが、現在目撃したことは、警察に全部お話しました。
＜その時＞

・＊僕が明日新宿に行ったことを黙っててくれてありがとう。
＜翌日＞

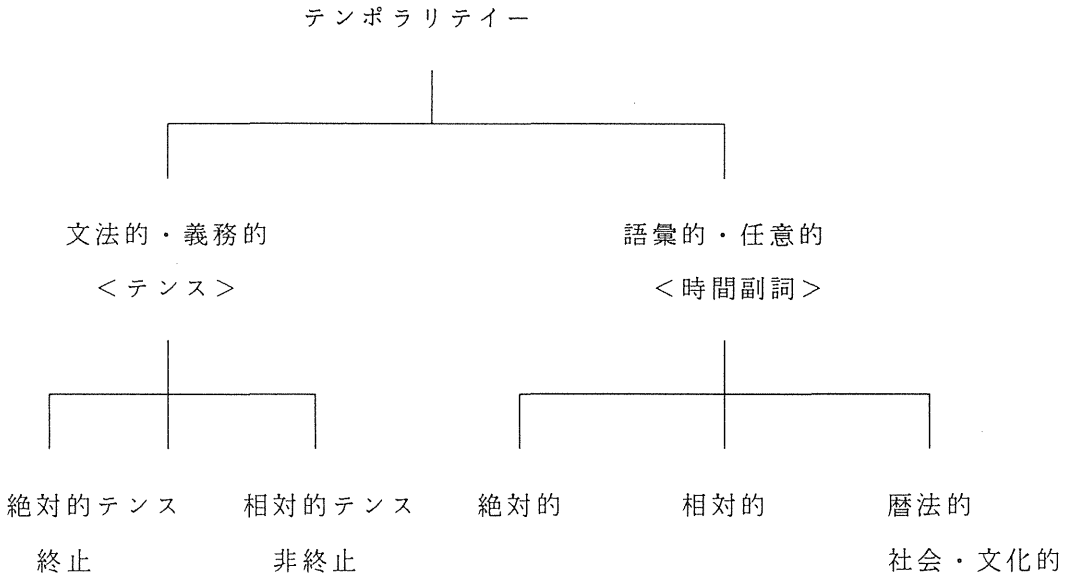
このように、語彙的なものとしての時間副詞では、従属化の有無（構文的条件）に関係なく、絶対的テンポラリテイーと相対的テンポラリティーが形式上、分化＝対立しているのであるが、さらに、時間の基準軸が、暦法的あるいは社会・文化的なものがある。

・１９７２年、紀元前３世紀、明治１５年、平成２年
・３月１０日、月曜日、３時５分、午後

・朝、昼、夜、春、夏

文法的テンスにおいて、このような歴史的事件（あるいは自然の変化）を基準軸とする対立を示す言語はないと言われているが、語彙的には、それぞれの民族文化によって様々な時間分割が行なわれることになろう。

こうして、まず、なにを時間的位置づけの基準軸とするかの観点から、現代日本語のテンポラリティーは、次のように図式化しうる。



第２に、時間的方向性の問題と時間的間隔性の問題。時間の基準軸からの方向性を問題とするテンスを〈vectorial tense〉、時間の基準軸からの隔たり量を問題とするテンスを〈metorical tense〉とよんでおけば、現代日本語は＜過去－非過去＞の２極対立のvectorial tenseである。従って、発話時直前であっても、１万年前のことであっても同じ過去形式が使用されるし、発話時と同時のことから、１万年後のことまで同じ非過去形を使用しうる。言語によっては、基準軸からの隔たり量を問題として、＜近－遠＞、あるいは〈today－not-today〉(hodiernal tense)のような文法的対立を示す場合もあるが、日本語のテンスはこの点に関して無関心である。

また、時間的方向性を問題とするテンスにおいても、＜過去－現在－未来＞の

ような3極対立、＜未来－非未来＞のような2極対立を示す言語もあると報告されている。

一方、語彙的なものにおいては、現代日本語も以上のような様々なパラメーターをふくみこんでいるといえよう。

第1に、「いましがた－いまごろ（現在）－いまに」の系列は＜過去－現在－未来＞で対立している。未来専用の時間副詞、現在専用の時間副詞、過去専用の時間副詞があるわけである。

第2に、「いましがた－さっき－このあいだ（このまえ）」の系列は、基準軸からの時間的隔たり量が大きくなっていく。また「あした（きのう）－あさって（おととい）」では＜発話時を含む日からみて次の日かさらに次の日か＞というかたちで、時間間隔が問題となっている。また、「ただちに（すぐに）－やがて」のように、発話時であれ、出来事時であれ、基準軸からの時間量の違いそのものを表す時間副詞も存在する。

さらに、「あのとき、あのころ、あのひ」のような形式は、（多く聞き手にも既知のことである）＜発話者の過去の体験時＞を指示するという限定がある。従って、次の例において、「あの（時、晩、日）」を「その（時、晩、日）」に、「その（日、時）」を「あの（日、時）」にいいかえることはできない。

・「それで、今日はあなたがどこか悪いの？」
「いいえ、悪くはないの。ただ、メリーヌだけでなく、私も子供ができたのよ」
「まあ、あの時、あなたは何も言わなかったじゃないの」
（時の止まった赤ん坊）

・「あなたはまだ私に何か隠していますね。どうぞ私を信じて、すべてをありのままに打ちあけて下さい。私も・・・もう決してあなたを疑いませんから」
「ナイフを捨てたんです」
「いつ？」
「あの晩・・・・家に帰る前に」

「どうして？」

「あの日、帰りのバスの中で、栗岡を見かけたんです」　（花の証言）

・「生まれてから、死んだ子供さんもいたんですね」

「いた」

「生まれて、どのくらいで死んだの？」

「その日に死んだ」　（時の止まった赤ん坊）

・「３日後に瀬田さんと一緒に川上からの人が来ます。その時、離縁することにして貰っていいのですね」　（花埋み）

このように、語彙的なものにおいては、様々なかたちで時間的位置を表し分けているといえよう。

こうして現代日本語の文のテンポラリテイーは、義務的な形態的表現手段としてのテンスを核＝中心として、任意的＝周辺的なものとして時間副詞が存在しているといえよう。そして、最も基本的な文（非従属的な文）におけるテンス対立の基準軸が、発話主体の発話行為時にあって、それ以外のものを基準軸にすることができないことに表れているように、テンスの本質はダイクティックな時間指示性にあるわけである。文のテンポラリティーの本質は、発話主体に属する時である発話行為の現存への指向性ぬきには規定できない。現在、未来、過去という時間は、その度ごとの話し手主体の発話行為の現働化によって生成される時間分割である。従属文における相対的テンス化、相対的時間副詞の存在は、主文によって、あるいはテンス形式によって、必ず発話時との関係が示されるということを前提としているのであれば、２次的＝派生的なものである。文によってある出来事を伝えようとする場合、その出来事の時間的位置づけの基準をどのような表現手段をつかってであれ、発話行為遂行時への指向ぬきに、他の基準軸を選ぶ言語は考えられないであろう。

Ⅱ．1　テンポラリティーとモダリティー、アスペクチュアリティー

以上が、現代日本語のテンポラリティーの基本的内部構造であると思われるが、以下は、テンポラリティーと他の要素（他の機能・意味的カテゴリー、話法、テクストのタイプ）との相関性の問題について、述べることにしたい。

まず、モダリテイー、アスペクチュアリテイーとの相関性の問題について。

テンポラリティーは、常にモダリティーと相関している。過去、現在の出来事が既に時間のなかに成立した出来事であり、未来の出来事はまだ時間のなかに成立してない出来事であれば、

過去、現在	＝実現済み（既定）	＝realis
未来	＝未実現（未定）	＝irrealis

であって、テンポラリティーとモダリティーは本来的に絡み合わざるをえない。英語のwill,shallの問題としても有名であるが、現代日本語においても「アクチュアルな未来の意味は、未来における実現が確実なものとして予定されていることを話し手がしっているばあいのほかは、話し手の予測的な態度、または意志的な態度というムード的な（モーダルな）ニュアンスが、おおかれすくなかれ、つきまとう」（鈴木1979）のである。Dahl 1985もまた、次のように述べる。

> The future differs epistemologically — and maybe also ontologically — from the present and the past, as Aristotle noted.
> A sentence which refers to the future will almost always differ also modally from a sentence with non-future time reference. This is the reason why the distinction between tense and mood becomes blurred when it comes to the future. This has been pointed out again and again in the literature.

また、多くの言語において、テンス形式の＜転移用法＞が存在しているが、これはモダリティーの変更によっておこってくる。現代日本語においても、次のよ

うに、モダリティーの変更と相関して、過去形(past tense)が「現在時(present time)、未来時(future time)」を表すことになる。

「発見性」

・あら、ここにあったわ。　　＜＝ある＞

・え、あなた結婚していたの。　＜＝結婚している＞

・そうだった。明日は制服着用だったね。＜＝そうだ＞＜＝制服着用だ＞

「反実仮想性」

・あの時決断しておけば、今頃は目的地に着いていたよ。＜＝着いている＞

「要求性」

・さあ、買った、買った。

また逆に、非過去形(non-past tense)が「過去時(past time)」を表すことになる。これは、話し手の感情・評価性に中立的な客観的モダリティーの場合はおこらず、主観的な感情・評価的モダリティーの場合におこるのである。（後述参照）

「客観的中立的」

・昨日は何時に来たの。　＜＊来る＞

ちょっと寄り道したので、9時に着いたわ。

＜＊寄り道する＞＜＊着く＞

「感情・評価的」

・昨日、どうしてあんなに遅れるのよ。恥ずかしかったわ。＜＝遅れた＞

だって、花子さんが寄り道するんだもん。いらいらしたわ。

＜＝寄り道した＞

このような、テンス形式の転移用法においては、「明日は休講だった」「この間なんか、真夜中に電話してくるのよ」のように、時間副詞（名詞）とテンス形式の共起のしかたのずれが特徴的である。

その唯一の意味・機能が、その名付けによって示されるものだけであるテンス

形式、つまりは過去時だけを指示する過去形、現在、未来時だけを指示する非過去形は、おそらくどのような言語においてもありえないのではないだろうか。その１つの理由として、以上のようなモダリティーとの相関性がある。

さて一方では、テンポラリティーはアスペクチュアリテイーと相関している。これは第１に、「社長は現在中国に行っています（食事をとっています）」「社長は現在中国にいます」とはいえても、「社長は現在中国に行きます（食事をとります）」とはいえないように、現在時と不完成性あるいは持続性の相関性として表れる。現代日本語において、完成相アスペクト＜スル＞は、基本的に未来を表すが、これが現在時を表す場合は、次のように、モダリティーの変更をともなっている。

・＜発話主体の態度表明＞	＜客観的叙述＞
花子さんが正しいと思います。	みんなは花子さんが正しいと思っています。
あなたを信じるわ。	私はあなたを信じています。
・＜発話主体の内的体験表出＞	＜客観的叙述＞
揺れるわね。こわいわ。	飛行機が揺れていますね。
もう、いらいらするわ。	先生いらいらしているわよ。話しかけちゃ駄目よ。
ああ、のどが乾くなあ。	のどが乾いているの。水ちょうだい。
・＜発話主体の感情・評価性＞	＜客観的叙述＞
どうしてそんなに泣くの。うるさい！	どうして泣いているの。
よく降るわねえ。うんざり。	ずいぶん降っていますよ。傘は？
・＜発話主体の直接的知覚＞	＜客観的叙述＝発話主体の間接的認識＞
おや、あいつが通る。	今頃あいつは外堀通りを通っているよ。
あら、がんばるわね。	花子さんも家でがんばっていますよ。

人称的限定のない客観的記述の場合は、本来的な持続相が使用されるが、話し手主体に限定された「態度表明性、感情・評価的態度表出性、内的体験表出性、直接的知覚性」というモダリティーの場合にかぎり、完成相スルが使用されることになる。

第２に、例えば英語の完了形が、アスペクト形式とも、複合テンスあるいは２次的テンスとも位置づけられることに表れているように、パーフェクト性にはアスペクチュアルな要素とテンポラルな要素とがからみあっている。現代日本語においても、「彼は（子供のころ）１度中国に行っているんだよ。中国語の上達がはやいはずだ」のような場合、＜発話時における効力（広義結果）の現存と発話時以前における運動の完成性＞というかたちで、テンポラリティーとアスペクチュアリティーが相互浸透しているのである。そして、この＜発話時における広義結果性＞をきりすてながら、現在・パーフェクト性から過去性（過去・完成性）への発展も多くの言語に見られる現象である。従って、典型的テンスのない言語において、アスペクト形式が２次的に、文のテンポラリティーを担うことはありうるであろう。

Ⅱ．２　テンポラリティーと間接話法

次に、引用話法（メッセージについてのメッセージ）との相関性の問題。

例えば英語のような言語においては、間接話法化において sequence of tenses の現象があるが、現代日本語にはない。テンス形式は、常に、原発話者の発話時が基準軸であって、引用者（今・この場における発話者）の発話時が基準軸とはならないのである。

例えば、次の場合、「僕」「行かれる」「あなた」という形式の使用からいって、明らかに直接引用ではなく、引用者の立場からの間接引用であるが、テンス形式は原発話者の発話時基準である。

・「支社長に、僕を待っているとおっしゃいましたか」
　「いいえ、そんなこと申しません」　（氷壁）

・「主人は、このホテルからどこへ行ったかわからないでしょうか？」
「１７日の夜、御一泊なさいまして、確か翌日の朝、黒部湖の方へ行かれるとかおっしゃって、ホテルを出られましたが」　（腐蝕の構造）

・「しかし、あの日はぼくは１時間以上もあなたを待って、それでも、あなたが現れないものだから・・・・」
「わたしをお待ちに・・・・。それはどこで」
「東口です。午後４時に」
「・・・・・・・」
「もっとも、あなたは何か都合が悪いようだと東円寺君は言っていました」
（小説日本銀行）

従って次の場合、引用者の発話時を基準軸とすれば、出来事は既に実現済みであるが、原発話者の発話時からみて、以後と位置づけられている。

・「引越した、いつだい」
「昨日の午後です」
「昨日の午後？　もういないのか？」
「ええ、わたしも驚いたわ。昨日の午後になって急に言い出すんですもの。あんな引越しってないわ」
「で、どこへ移った？」
「本人は、何でも、千住の方に越すとか言ってましたけど」　（砂の器）

・「いえ、・・・そこに私の２号を囲っておりましてそこに泊まりました。自宅のほうには、仕事で遅くなるから深川の事務所に泊まると言っておいたのです」　（葬送行進曲殺人事件）

次の場合も、引用者の発話時を基準軸とすれば、現在時のことであるが、原発話者（＝母親への伝達者）の発話時（＝伝達時）を基準軸として以前と位置づけられている。

・「そして今は戦犯となり、処刑の日も間近と思われます。それで、もし閣下が母にお会い下さる日がありましたら、私が母をみとらずに先立つ詫びを

いっていたと、あの世から母を守り続けますと、申していたと・・・・伝えていただきたいのです」　（責任）

このように、テンス形式は常に、原発話者の発話時が基準軸であるが、一方、時間副詞の方は、次のように、引用者の発話時を基準軸としての形式にかえることができる。例えば次の場合、テンス形式の方は原発話者の発話時を基準軸としてスルが、時間副詞の方は引用者の発話時を基準軸として「昨夜」が使用されている。

・「魚津さんがここへ来なさることになっていたんですか」
「そうです」
「いつ」
「予定では昨日の朝、新穂高温泉を出て、雌滝、雄滝という滝を上り、それからD沢というところを登って、昨夜はここへ泊ると言っていました」
（氷壁）

従って1つの出来事の時間的位置づけが、原発話者を基準軸としてと同時に、引用者を基準軸としてもなされることになる。次の場合も同様である。

・「それで、曾根さんは、今日、お父さまのところへお礼にいらっしゃると言っていました」
「ほう」
「先刻メインテーブルが1つ空いたままになっていたな。そこへ曾根君に坐ってもらおうか」　（花壇）

そして、以上のように引用者の発話時を基準軸とする絶対的時間副詞が使用できない場合には、相対的時間副詞に転換することになる。次の例の場合、直接引用であれば「きのう」である。

・「写生を始める前に、わたしは、子供たちを集めて、いろいろな注意をしました。それから、前の日に自分のいた場所へいらっしゃい、と言ったので

す。駆け出していった大羽という子が、すぐに、先生、こんなものが落ちていました、と言って、わたしのところに名刺入れを持って来たのです」

（影の告発）

次の場合も、原発話者の発話時基準であれば「このあと」であるが、「ご馳走してくれる」のように引用者の立場からの間接話法に転換されているがゆえに、時間副詞は、相対的時間副詞が使用されることになる。

・「だってえ・・・それじゃ、どうして立光製作所の入社試験なんて受けに行ったの」

「ああ、あれは、そのあとで高級料理をご馳走してくれると言ったから、それが食いたくて行っただけ。僕は食い物には弱いって言ったでしょう」

（葬送行進曲殺人事件）

従って、次のような直接引用は、テンス形式の方は過去形に転換することはできないが、時間副詞の方は、間接話法化させて、「翌日」に転換できる。

・「そうそう、このあいだ、黒が泣虫といっしょにやってきたよ」

「黒と泣虫が？　よくここがわかったね、連中に」

「おい、奴等がきたのは金曜日だったな」

「そうよ。金曜日の昼だったわ」

「その前の木曜日に、俺はちょっと新宿まで用がありでかけた。そのとき、新宿駅で黒にあったのさ。ここを教えたら、明日、泣虫をつれて行くよ、と言われてな、そしたら、黒の奴、ほんとに泣虫をつれてきた。・・・」

（冬の旅）

このように、現代日本語においては、間接話法化される場合、テンス形式は常に原発話者を基準軸として、引用者が基準軸となることはないが、時間副詞は引用者が基準軸となる。そしてその場合、引用者の発話時を基準軸とする絶対的時間副詞に転換されるが、それが不可能な場合には、相対的時間副詞に転換される。引用者の発話時からみて、１日前に、原発話者が「明日（今日）お前のうちに行

くよ」といったのであれば、「今日（昨日）僕のうちに来ると言ったよ」であって「＊翌日（その日）僕のうちに来ると言ったよ」とはならない。が、１０日前にいったのであれば、「翌日（その日）僕のうちに来ると言ったよ」というかたちで、間接話法化される。

Ⅱ．３　テンスと時間副詞の機能分担

テンポラリティーの表現手段として、文法的なものと語彙的なものとの２つの手段をもつことは、２つの機能をはたすことになるといえよう。

①テンスによる抽象的時間分割と時間副詞による具体的限定化
②２つの観点からの出来事の時間的位置づけ

第１の場合は、「来年、中国に行きます」あるいは「いつ行ったの」「昨日よ」のような場合に典型的である。テンス形式が一般的に＜発話時以後＞＜発話時以前＞を表すとすれば、時間副詞は、その時間（過去時、未来時）のなかでの時間的位置を具体的に特定化する。ここでは、テンス形式と時間副詞の共起のしかたにおいて、ずれはない。「彼はその時、前日もらった用紙をなくしてしまっていた」「翌日会議に出席する人にだけ用紙を渡した」のような相対的テンポラリティーの場合も同様である。

第２の場合は、次のように、テンス形式と時間副詞の共起のしかたのずれが特徴的である。

(1)「昨日、あの人ったらひどいこと言うのよ。腹がたつわ」
　「彼、この間なんか、ドラマ見ながら泣いているの。純情ね」
(2)「あの時確かに彼、昨日病院に行く、と言っていました」

（１）の場合には、時間副詞によって、本来的なかたちで出来事の客観的時間的位置づけ（過去時指示）が行なわれ、テンス形式によって、過去の出来事の記憶

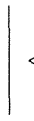
の生々しさ、つまりは発話時における過去の出来事の心理的アクチュアリティー性＝主観的現存性が表現される。ここでは、客観的な観点と、話し手の主観的観点との２つの観点から、１つの出来事の時間指示が行なわれている。（２）の場合には、時間副詞は、引用者の観点から「引用時より１日前」と位置づけられ、テンス形式は、原発話者の観点から、「以後」と位置づけられている。ここでは、引用者の発話時と被引用者の発話時の２つの観点から、１つの出来事の時間指示が行なわれている。このように、テンス形式と時間副詞の共起のしかたのずれは、＜客観的時間と主観的（心理的）時間意識＞＜現在の発話時と過去の発話時＞というようなかたちでの、複合的時間指示につながるのである。

話し手は、文のテンポラリティーの２つの表現手段である、テンスと時間副詞をうまく共起させながら、時間指示の限定化のみならず、時間指示の観点の複合化を行なうといえよう。

そして、以上の例からも分かるように、テンス形式には、次の３つの用法があって、複雑である。

①本来的＝基本的なものである絶対的テンス用法
　（テンス形式と時間指示の本来的照応関係、終止の位置）
②構文的従属化と相関する派生的な相対的テンス用法
　（他の出来事との時間関係、非終止の位置）
③モダリティーと相関する派生的な転移用法
　（テンス形式と時間指示のメタフォリカルな関係、終止の位置）

「終止」　　＜構文的条件の変更＞　　「非終止」
基本的な絶対的テンス用法 ―――――――― 派生的な相対的テンス用法
「叙実的」


＜モダリティーの変更＞

「叙想的」
派生的な転移用法

一方、時間副詞のほうは、絶対的なものは常に絶対的であり、構文的条件の変更によって相対化したり、モダリティーの変更によって転移することはない。また相対的時間副詞が絶対化することもなく、常に本来的＝基本的用法のみであって、派生的用法がない。

従って、時間副詞によって本来的なかたちで、出来事の時間指示が具体的にできることが、テンス形式の派生用法、特に転移用法の存在を可能にしているともいえよう。

以上の事実は、文レベルのテンポラリティー、つまりは文の対象的内容をなす出来事の時間指示（time reference)の問題が、テンス対立の問題に還元しえないことを示している。テンスと時間副詞とを総合的にとらえながら、文レベルの時間指示性の問題を精密化してゆくことが、今後の課題である。そして、文レベルのテンポラリティーの追求は、場面・文脈的なもの、またディスコース（テクスト）のタイプとの相関性ぬきには、おこないえないであろう。テンポラリティーという機能・意味的カテゴリーの取出しは、他言語との対照的研究を進めるために、そしてその前提をなす、個別言語（日本語）における時間指示性のトータルな理論化のための必要条件であると思われる。形態論的カテゴリーとしてのテンスは、テンポラリティーというマクロな観点からいえば、その重要な表現手段の１つである。従って、テンポラリティーの追求は、同時にそのマクロな観点からのテンスの位置づけを行なうことにつながるであろう。

Ⅲ　テンポラリティーとテクストのタイプ

さて、以上の考察は、すべて、人間の最も基本的な言語活動である＜はなしあい＞というディスコース（テクスト）のタイプに限定してきた。しかしながら、人間の言語活動には、＜はなしあい＞とは異なるタイプのものが分化している。例えば、次のような文は、＜はなしあい＞というデイスコース（テクスト）において現象することは想像することができないのである。

・賢一郎はいま、独りきりになりたかった。自分に責任があるとは思えないが

どこまでもついて来る登美子が、暗黙のうちに彼の責任を追求してくるように思われて憂欝だった。　（青春の蹉跌）

・しかもそのあとで私は、私の母の見ている高校野球のテレビの前に座った。格別私が野球好きというのでもない。画面のなかで高校生の走るのを目で追うにすぎない。が、見ていれば母といっしょに声を上げたりした。それは私の余裕であった。病院では今日も原さんは神経を立てているにちがいなかった。　（夏の栞－中野重治をおくる－）

従って、文のテンポラリティーは、ディスコース＝テクストのタイプ化ぬきには把握できないといえよう。これは、仏語の passé simple と passé composé の問題として有名であるが、言語によっては narrative tense と名付けられている＜かたり＞のディスコースにおいてのみ使用されるテンス形式があることが報告されている。

現代日本語においては、文法的形式としても、語彙的形式としても、＜はなしあい＞とは異なるテクスト専用の形式はないが、次のような現象は、はなしあいには起こらないものである。

第１に、次のような絶対的時間副詞の転移用法。以下の例では、絶対的時間副詞は、発話時（＝書き手の書く行為現存の時）ならぬ、発話内容時である他の出来事時を基準軸として、相対的に使用されている。

＜小説の地の文＞

・　乗船場に近づくと、海際にうづくまってゐる踊子の姿が私の胸に飛び込んだ。傍に行くまで彼女はじつとしてゐた。黙って頭を下げた。昨夜のままの化粧が私を一層感情的にした。　（伊豆の踊子）

・「そう云う自分はやっぱりこの芸者と同じ事なのだ」

　彼は腹の中で自分にこう言い渡した。若い時から白髪の生えたがる性質の彼の頭には、気のせいか近頃めっきり白い筋が増して来た。　（道草）

・「やはり帰るの？」

奥の間で支度をしていると友子が７つになる男の子を連れてきて言った。

「でも母さんの死に顔も見られたから」

「せめて葬式にだけでも出たら」

今夜が正式の通夜で、明日午前の出棺だった。４人の姉や親戚達はまだ、４、５日は残る予定だった。（花埋み）

・　魚津は何も考えようとしなかった。考えるとなると、考えることは沢山あった。明日は元日であった。元日ということに繋がって、家で今頃せっせと正月を迎えるために立ち働いている母親の姿。年越の酒を飲んでいるにちがいない父親のこと。丁度１年会っていない二人の弟妹。（氷壁）

＜紀行文＞

・　列車はローザンヌ駅で停車したのち大きく方向を転じ、南東に向って進行をはじめた。間もなく右手にはレマン湖が広がり、そのはるか彼方には「ダン・デュ・ミディ」とも呼ばれるスイス・アルプスの連峰が紫色の薄もやに包まれて雄大な姿を見せる。ヴヴェの駅を発車して十分も経たぬうちに、列車は急に速度を落とす。窓の外を見ると、今しがた列車の通りすぎた小さな駅の標示板には、まぎれもなく「クララン」の文字が記されていた。その直後、列車はモントルー駅に滑りこむように到着した。

（フルトヴェングラー）

＜小説の地の文＞あるいは＜紀行文＞といったテクストのタイプでは、絶対的時間副詞のメタフォリカルな相対化がおこる。従って、以上の「昨夜、今夜、明日」にかえて「前夜、その夜、翌日」を使用しえて、どちらにおいても時間指示は同じである。このような現象は＜はなしあい＞ではおこりえないのである。

今夜が正式の通夜で、明日午前の出棺であった。

＝その夜が正式の通夜で、翌日午前の出棺であった。

次の小説の地の文では、相対的時間副詞と絶対的時間副詞が共存しているが、最初の例の、「その日」を「今日」に、「昨夜」を「前夜」にかえても、時間指示性は同じである。

・　その日は、日のあるうちいっぱい、信太郎は病室で母親の枕もとに坐っていることにした。結局それが一番気持ちの落ちつく方法だと思ったからだ。看護人がそれを迷惑がるふうを見せることは、やはり昨夜と変わりなかった。
（海辺の光景）

・　彼が久しぶりで「はけ」の家を訪れて、折から来合せた富子に会った日、富子はもう１つの用事を持っていた。その晩富子の家では、もとの大野の会社の社員で、今は退社してある組合の書記局に入っている貝塚という共産党員を晩飯に呼んでいた。　（武蔵野夫人）

・　出立の日は早く明けた。
　譲治が、郊外に住む彼の師に別れを告げるべく早朝家を出たせいもあったし、前日で準備も後始末も悉く片付いていたので邦枝は雑事に妨げられることなく存分に日本に居られると思い早起きしたからでもある。前夜遅くまで手伝ったメイドは、今日は午後出てくることになっていた。　（地唄）

また、次のような＜日記＞あるいは＜日記体＞というテクストのタイプにおいても、最初の例の「この日」を「今日」に変えても、また次の例の「昨日」を「前日」に変えても、時間指示性は同じである。

・　１２月２０日（土）――――――この日は何となく休暇気分で過ごす。夜眠れないまま「東チモール」についての本を読み、私が３カ月過した、このインドネシアに蹂躙された旧ポルトガル領チモール島の悲劇の実態を知り、共に過した数々の土地の友人の悲運を思い、暗い気分に陥り、とうとう朝まで寝つかれなかった。　（知の旅への誘い）

・　8月24日・本栖湖 —— 白糸の滝

7時起床。やや曇。GOは昨日の奮闘で気持ちよく疲れたらしく、まだ眠っている。そっと蒲団を抜けて、荷物を整理しているうちに、ポッカリ目を覚ます。7時半だ。　（母と子の旅立ち）

このように、小説の地の文・紀行文・日記のようなテクストのタイプでは、絶対的時間副詞の転移的相対化がおこって、相対的時間副詞との、時間指示性の対立を失う。このようなテクストのタイプに共通しているのは、書き言葉として現象し、話し手＝書き手の発話の場＝書く行為現存の場への指向性ぬきに、発話対象をなす過去の出来事を提示しうるということであろう。＜はなしあい＞というテクスト（ディスコース）においては、文の対象的内容をなす出来事の時間的位置づけは、常に、発話行為の現存時への指向性ぬきには行いえない。

従って、発話行為の場へのアクチュアルな指向性をもつテクストのタイプと、発話行為の場から切り離して、過去の出来事を提示しうるテクストのタイプとを区別しなければならないであろう。後者においては、発話の場への指向性ぬきに、過去の出来事が提示されるがゆえに、絶対的時間副詞は、発話時ならぬ、他の出来事時を基準軸として、転移的に使用されることになる。

このような現象は、テンス形式においても起こる。次の非過去形を過去形に変えても、時間指示性は同じである。＜小説の地の文＞の例では、発話内容時を基準軸として、＜同時（転移的現在）＞＜以後（転移的未来）＞＜以前（転移的現在パーフェクト）＞として位置づけられている。

＜小説の地の文＞

・　あくる朝、二人の子供は背に籠を負い腰に鎌を挿して、手を引合って木戸を出た。山椒大夫の所に来てから、二人一緒に歩くのはこれが始めである。

厨子王は姉の心を忖り兼ねて、寂しいような、悲しいような思いに胸が一ぱいになっている。きのうも奴頭の帰った後で、いろいろに詞を設けて尋ねたが、姉はひとりで何事かを考えているらしく、それをあからさまには打ち明けずにしまった。　（山椒大夫）

＜＝一ぱいになっていた＞

・　３時開演の予定が、２０分遅れて始まっていた。２番目に梶川流の若家元が新振付で「千鳥」を踊る。その地方を邦枝は受け持っているのだ。迫ってくる時間に気を揉みながら、彼女は父の姿の現われるのを未だか未だかと待っていた。　（地唄）

＜＝踊ることになっていた＞

・「コレージュ・ド・フランスで、ポンチイの講義を聞いたんだけど・・・」

たとえばそんな得意そうな帰国者の一言が、研究室の残留組にどんな圧力をあたえるかを、田中は日本にいる間、しばしば自分で味わっている。

（これで、俺は助手の菅沼に２歩、先んじたわけだ）

古綿色の空に浮かぶエッフェル塔にむかって歩きながら、田中は脂性の鼻にずり落ちる眼鏡を指であげて、心の中で自問自答した。　（留学）

＜＝味わっていた＞

＜日記（体）＞

・　６月１５日

サイパン島に米軍の上陸がはじまった。連合艦隊がＺ旗をかかげ、残存全艦艇をもって出動したというはなしである。戦果についてはまだなんら発表がない。

はじめて離著陸同乗、伝声管のいいのをうばいあいである。風向北、風力７。３０分飛行する。　（雲の墓標）

＜＝はなしであった、うばいあいであった、飛行した＞

・　１２月３日（水）――空路ワシントンに向う。ここのヒルトンホテルで日曜までアメリカ人類学会が開かれている。１日７０ドルの部屋代は自前で旅行している者には危険な値段なので相部屋の主を探して一夜を過ごす。

（知の旅への誘い）

＜＝向った、開かれることになっていた、過ごした＞

また、次のような＜ルポルタージュ＞というテクストのタイプにおける、非過去形を過去形にかえても時間指示性は同じである。そして過去形も＜転移的現在パーフェクト＞の意味で使用されているので、「とっくに家へひっこんでいた」「（既に）いなくなっていた」のかたち（過去パーフェクト）に言い換えることができる。非過去形が、あたかも出来事生起の現場から報告しているかのように、出来事の展開時そのものを表しているとすれば、過去形のほうは、それに先行する出来事を表しているわけである。（そして、最後の文の過去形は、本来的なかたちで、発話時＝書く行為の現在を基準軸として使用されている。）

・　やがて、２台の犬ゾリは何となく動きだす。「オワーイ、オワーイ」と、二人は犬たちには声をかけるが、私たちには何も言わない。この部落を訪問中の、エスキモー語を話すイギリス人と立ち話をしていた私たちは、彼に「そら出発だ、置いてかれるよ」と言われ、あわててソリにとび乗る。出発らしい雰囲気は毛ほどもない。荷の積みこみを手伝っていたイトケックやイギの妻たちは、とっくに家へ引っこんだ。ふざけ合っていた隣人たちもいなくなった。手を振って見送るのは、エスキモーではなくて、一人のイギリス人だけ。その影が、地平線に近づいた太陽の逆光の中で、小さな黒点となって消える。

５月１８日（１９６３年）午後８時すぎ。私たちはこうして、ホールビーチのエスキモー部落をあとにした。　（カナダ=エスキモー）

このように、非過去形（そして現在パーフェクトとしてのシタ）の転移的使用は、発話の場＝書く行為の現存の場への指向性を断ち切って、過去の出来事の時間展開性そのものに焦点をあてることになる。そして、非過去形のこのような使用のされ方は、＜話し手の感情・評価性、知覚性＝眼前描写性＞の機能に限定された＜はなしあい＞における非過去形の使用のされ方とは、大きく異なっているのである。

こうして、＜はなしあい＞という発話の場（いま-ここ-わたし）への直接的指向性をもつテクストのタイプと、発話の場へのアクチュアルな指向性をもたないで過去の出来事を提示しうるテクストのタイプとでは、テンス形式、時間副詞の

使用のされ方が異なってくる。この対立が決定的なかたちになるのは、（３人称）小説の地の文という＜かたり＞のテクストにおいてであろう。（この点については、工藤 1993参照）

以上、＜出来事の時間的位置づけ＝時間指示＞に関わる機能・意味的カテゴリーであるテンポラリティーの表現手段として、文法的テンスのみならず、語彙的時間副詞（名詞）をも統一的にとらえながら、テクストのタイプとの相関性、さらには構文的条件、モダリティーとの相関性のなかで、文のテンポラリティーを精密化してゆくことが、個別言語学的にも、対照言語学的にも、今後の課題となるであろうことを述べた。

参考文献

池上嘉彦1986「日本語の語りのテクストにおける時制の転換について」
（日本記号学会編『語り－文化のナラトロジー』東海大学出版会）

伊藤英人1990「現代朝鮮語の過去テンス形式の用法について（１）」
（『朝鮮学報』137）

奥田靖雄1988「時間の表現(1)(2)」（『教育国語』94、95号　むぎ書房）

川端善明1964「時の副詞（上、下）」（京都大『国語国文』33巻11、12 号）

管野裕臣1896「朝鮮語のテンスとアスペクト」
（学習院大学共同研究所紀要　９号）

木村英樹1982「テンス・アスペクト（中国語）」
（『講座日本語学　外国語との対照Ⅱ』明治書院）

金水敏1990「『報告』についての覚書」
（『日本語のモダリティ』くろしお出版）

工藤浩1985「日本語の文の時間表現」（『言語生活』403）

工藤真由美1989「現代日本語のパーフェクトをめぐって」
（『ことばの科学・３』むぎ書房）

―― 1989「現代日本語の従属文のテンスとアスペクト」

（横浜国立大学人文紀要　３６号）
―― 1991「過去の出来事の表現－テンス・アスペクト体系とその機能－」
（横浜国立大学『国語研究』９号）
―― 1993「小説の地の文のテンポラリティー」
（『ことばの科学・６』むぎ書房、近刊）
鈴木重幸1979「現代日本語のテンス」（『言語の研究』むぎ書房）
曽我松男1984「日本語の談話における時制と相について」
（『月刊言語』13巻４号）
高橋太郎1985『現代日本語のアスペクトとテンス』
（国立国語研究所　報告８２）
寺村秀夫1984『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』（くろしお出版）
益岡隆志1991『モダリティの文法』（くろしお出版）
三上章1953『現代語法序説』（くろしお出版）
Arnovick, L. K. 1990. The development of future constructions in English.
Peter Lang.
Benveniste, É. 1966. Problemes de linguistique générale. 1. Gallimard.
―― 1974. Problemes de linguistique générale. 2. Gallimard.
Bondarko, A. V. ed. 1987. Teorija funkcionl'noj grammatiki. Leningrad.
Bondarko, A. V. 1971. Vid i vremja russkogo glagola. Moscow.
―― 1991. Functional grammar. John Benjamins.
Bronzwaer, W. J. M. 1970. Tense in the novel. Wolters-Noodhoff.
Bybee, J. L. and Ö. Dahl. 1989. "The creation of tense and aspect systems in the languages of the world." Studies in Language 13.
Canavan, J. R. 1983. The English tense system.
Bouvier Verlag Herbert Grundmann.
Casparis, Christian Paul. 1975. Tense without time: The present tense in narration. Schweizer Anglistische Arbeiten, 84. Berne: Franke.
Chung, S. and A. Timberlake. 1985. "Tense, aspect and mood."
In Shopen, ed., 1985.
Comrie, B. 1985. Tense. Cambridge UP.

—— 1986. "Tense and time reference."
Journal of Literary Semantics 15.

Coulmas, F. ed. 1986. Direct and indirect speech. Mouton.

Crystal, D. 1966. "Specification and English tenses."
Journal of Linguistics 2.

Dahl, Ö. 1984. "Temporal distance" In B. Butterworth, B. Comrie and Ö. Dahl eds. Explanations for language universals. Mouton.

—— 1985. Tense and aspect systems. Basil Blackwell.

Declerck, R. 1991. Tense in English. Routledge.

Ehrlich, S. 1989. "Referential linking and the interpretation of tense."
Journal of Pragmatics 14.

Engel, D. M. 1990. Tense and text: A study of French past tenses. Routledge.

Fillmore, C. 1975. Santa Cruz lectures on deixis.
Indiana University Linguistics Club.

Frawley, W. 1992. Linguistic semantics. Lawrence Erlbaum Associates.

Fleischman, S. 1982. The future in thought and language. Cambridge UP.

—— 1985. "Discourse functions of tense-aspect oppositions in narrative." Linguistics 23.

—— 1990. Tense and narrativity. University of Texas PR.

—— 1991. "Verb tense and point of view in narrative."
In Fleishman, S. and L. R. Waugh eds. 1991.

Fleischman, S. and L. R. Waugh. eds. 1991. Discourse pragmatics and the verb.
Routledge.

Givón, T. ed. 1978. Discourse and syntax.
Syntax and Semantics, 12. Academic Press.

Givón, T. 1984. Syntax. John Benjamins.

Gvozdanović, J and Th. A. J. M. Janssen. 1991. The function of tense in texts.
North-Holland.

Jakobson, R. 1957. "Shifters, verbal categories and the Russian verb."
In Selected Writings, vol. 2. Mouton (1971).

James, D. 1982. "Past tense and the hypothetical:A cross-linguistic study."
Studies in Language6-3.
Kamp, H. and C. Rohrer. 1983. "Tense in texts." In R. Bauerle, C. Schwarze, and A. von Stechow. eds. Meaning, use and interpretation in language.
Spinger.
Kipasky, P. 1968. "Tense and mood in Indo-European syntax."
Foundations of Language 4.
Klein-Andreu, F. ed. 1983. Discourse perspective on syntax. Academic Press.
Lyons, J. 1977. Semantics. vol 2. Cambridge UP.
Maslov, Ju. S. ed. 1978. Voprosy sopostavitel'noj aspektologij. Leningrad.
Monville-Burston, M. and L. R. Waugh. 1991. "Mutivalency:the French historical present in journalistic discourse."
In Fleishman, S. and L. R. Waugh eds. 1991
Myhill, J. 1992. Typologycal discourse analysis. Blackwell.
Richards, B. 1982. "Tense, aspect and time adverbs:part 1."
Linguistics and Philosophy 5.
Schopf, A. ed. 1989. Essays on tensing in English Ⅱ:Time, text and modality.
Niemeyer.
Schiffrin, D. 1981. "Tense variation in narrative." Language 57-1.
Schopen, T. 1985. Language typology and syntactic description.
Cambridge UP.
Singer, J. V. eds. 1990. Pidgen and Creole tense-mood-aspect systems.
John Benjamins.
Smith, C. S. 1981. "Semantic and syntactic constraints on temporal interpretation." In P. J. Tedeschi ed. Syntax and Semantics Vol. 14.
Academic Press.
Steele, S. 1975. "Past and irrealis."
International Journal of American Linguistics 41.
Weinrich, H. 1970. Tense and time. Archivum Linguiticum 1.
Wolfson, N. 1982. The conversational historical present in American Eng-

lish narrative. Foris.

Jespersen, O. 1924. The philosophy of grammar.

（半田一郎訳『文法論の原理』岩波書店）

Weinrich, H. 1964. Temps. W. Kohlhammar.（脇坂豊他訳『時制論』紀伊国屋書店）

現代日本語における過去の出来事の表現　その2
－会話文の歴史的現在用法を中心に－

工藤真由美

1　イエスペルセン、ボンダルコ等によって述べられているように、言語現象をとらえるにあたっては、形式から意味・機能へとすすむアプローチと、意味・機能から出発してそれが形式的にどう表現されるかを問題にするアプローチがあるであろう。

前者においては、例えば、過去形が＜非過去形との対立＞のなかで、カテゴリカルな意味、アスペクト、構文的条件、モダリティーと相関しつつ、次のような、多義的な文法的意味を表すという事実を記述してゆくことになる。

運動動詞

テンス＼アスペクト	完成相	持続相
非過去形	スル	シテイル
過去形	シタ	シテイタ

非運動動詞、形容詞、名詞述語

非過去形	イル	サムイ	病気ダ
過去形	イタ	サムカッタ	病気ダッタ

完成相過去形（シタ）の意味

①（終止の位置）　発話時以前

②（非終止の位置）主文の出来事時以前

③（終止の位置）　近未来・要求（命令）性

持続相過去形（シテイタ）、非運動動詞、形容詞、名詞述語の過去形の意味

①（終止の位置）　発話時以前

②（非終止の位置）主文の出来事時以前

③（終止の位置）　現在（未来）・発見性

　　現在（未来）・反実仮想性

以上のおおざっぱな記述からもわかるように、テンス的意味は、範疇的にとらえられた語彙的意味（時間のなかでの展開性のある運動動詞であるか否か）、アスペクト（完成相か持続相か）、構文的条件（終止の位置か非終止の位置か）、モダリティー（客観的か主観的か）と相関している。そして、その結果、過去形というテンス形式は、基本的には＜発話時以前＝過去＞という時間的意味を表す点で非過去形と対立しているが、派生的には＜現在・未来＞を表す場合も起こってくる。

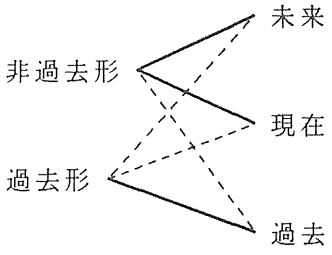
一方、後者（意味・機能から形式へ）のアプローチにおいては、例えば「発話時以前＝過去時」という時間的意味が、次のような複数の形式で表現され、それらがどのような機能分担を行なっているかが追求されることになる。

過去時の表現形式

①過去形式（シタ、シテイタ等）

②非過去形（スル、シテイル等）

つまり、単純化して言えば、テンス形式（tense)と時間的意味（time）とが＜１対１＞の対応関係をもっているわけではないことが、２つの観点からのアプローチを成立させるのである。



ここでは、後者の観点から、現代日本語において、発話時以前に成立した過去

の出来事が、複数の表現手段でどのように表し分けられているかを記述していきたい。なお、工藤1991で述べたように、現在パーフェクトのシテイルも、過去時を表現する重要な手段として存在するが、本稿では、いわゆる歴史的現在用法としての非過去形の使用のされ方の問題に焦点をあてることとする。

その際、前述の拙論「テンスとテンポラリティー」で述べたように、テクストのタイプとの関係性が、まず問題となってくるが、ここでは、＜会話文＞つまり＜はなしあい＞という最も基本的なディスコースに限定する。

これまでの研究においては、小説の地の文に代表されるような＜かたり＞のテクストにおける、過去形のかわりに非過去形を使用する文体的用法としての、いわゆる歴史的現在用法の問題がとりあげられてきている。そしてこの用法は、完成相（スル）ではなく、持続相、非運動動詞、形容詞、名詞述語、否定形のような、インパーフェクティブなものに頻繁に現象することも指摘されている。

しかしながら、日常的会話においても、次のように、過去の出来事の表現において、過去形にかえて非過去形を使用することがおこる。

この用法は、小説の地の文の場合とは異なり、運動動詞完成相（スル）にも頻繁に起こり、あらゆる述語形式にみられるものである。そして、過去の一連の出来事の連続を述べる時に、過去形と混在させながら使用される場合もあれば、1つの出来事を述べる時に使用される場合もある。

・「私は立花茂造だといくら言っても警察は私を賊だときめてつかまえるんですよ。ひどいものです」　（恍惚の人）

・「ただ今のお客さま、ずいぶんお子さんがおすきでいらっしゃいますね」
「そう」
「廊下でお会いしたら、ちょっとだかせてくれって、いつまでもおだきになって、ほおずりしていらっしゃいますの。まるで、おとう様のようですわ」
（女の一生）

・「――寝ようとしているところへアパートのおばさんが飛んできて、子供が生まれるって言うんだよ。じゃあ、あんた起きてちゃ駄目じゃないかと

ぼくは言ったんだ。そしたら、馬鹿ね、わたしはやもめじゃあないの、って怒るんだけど、そのおばさんの腹のでっかいったらない。――生まれかかっているのは2階の部屋で、新聞記者のおやじが飲んでばかりいて、普通に帰ってきたことなんかないんだよ。その晩もいないんだ。もう半分ばかり生まれてしまっていて、病院へも運べない。で、2階はごった返しているから、下でお湯を沸かして運べという。――ところがお湯を沸かしはじめたら、おばさんが来て、産婆を見つけに行った人が戻ってこないから、あんたどこかで産婆を探して連れて来いって言うんだよ。しかし産婆ってなかなかないんだね。とうとう電信柱に看板があったから、そこへ行って見たら、4、5年前に引っ越したんだって。嫌になっちゃったな。・・・・・・」　（幼児狩り）

このような＜会話文＞における、いわゆる歴史的現在用法（時称の転移用法）の存在は従来十分記述されていない。そして、小説の地の文における場合とは、異なったかたちで使用されているのである。以下、現代日本語の会話文における、歴史的現在用法の特徴を記述することにする。

2　第1の特徴は、過去を指示する絶対的（ダイクティックな）時間副詞、あるいは時間状況語（文）との共起である。このような共起のしかたは、地の文＜かたり＞においてはみられない。

・「さっきお部屋へ戻ってみたら、もういらっしゃらないんでしょう。どうなすったかしらと思うと、えらい勢いでお一人山へ登っていらっしゃるんですもの。窓から見えたの。おかしかったわ。・・・・・」　（雪国）

・「この間もその父が手紙を寄来して、お前が赤になるとおれは割腹しなければならんなんておどかして来るの。私は自分も生命がけですから、お父さんの生命のことまで考えていられませんて返事してやったわ」

（朱を奪うもの）

・「昨日の午後？　もういないのか？」
「ええ、わたしもおどろいたわ。昨日の午後になって急に言い出すんですもの。あんな引越しってないわ」　（砂の器）

・「浅井先生ですの？あたし浅井先生に打ちあけられましたとよ。浅井先生たら、3日前の晩、ひょっくり、うちのアパートに来られるんですもん。ほんとに驚いたわ。だってえ、浅井先生たらお酒ば飲んで・・・・、あたしに・・・・」　（海と毒薬）

第2の特徴は、話し手のその過去の出来事に対する感情・評価的態度とのむすびつきである。従って、次のように、話し手の感情・評価性を示す形式（文、語）との共起、共存が特徴的であって、このようなことも、地の文＜かたり＞の場合にはみられない。

・「だって、私はパン屋よ。朝の3時に起きてパンを焼くのよ。そしたら、チャーミングな青年が、きっかり4時に通りを横切って行くの。その青年を今度は夜にまた見たの。びっくりぎょうてん。なんと、マサコと一緒で、明かりの消えたアムシュタインさんの家に入って行くじゃない。そしてあくる朝、私の店の前を通って帰って行くの。私、ちょっと心が騒いだわね。悔しかったわ。嫉妬ってやつかしら」　（ドナウの旅人）

・「去年の夏はおかしかった。芦ノ湖のホテルで、予約しといた部屋が行ってみたら意外に悪いんです。ママもパパも気分害しちゃって、ママは坐ったまま、パパは立ったまま悪口ばかし言っていたら、お勘定の時になってみて、馬鹿馬鹿しく安いのね。普通の相場の半分ぐらい。途端に二人とも機嫌なおしちゃって、ママなんか、また来ようね、なんて車に乗るや現金に言うんですもの」　（バビロンの処女市）

・「ともかく、俺は退屈だったから、早い目に行ったのよ、劇場に。新歌舞伎座っての？　そしたら、開場時間より30分から早く着いちまって、中に

入れてくんないの、あったま来たァ。雨、降ってたしよォ。・・・・」

（開幕ベルは華やかに）

・「私が『新世界』の中のお店で働いている時この人が来てねえ、君、こないだ着ていた白地に桃色の刺繍のついてたブラウスとってもよかった、なんて急に言い出すじゃない。私感激しちゃった。その次の日、ちょっと風邪ひいたのよね。大して悪くはなかったんだけどさ。そのことを話のついでに喋っちゃったのよ。そしたら、その次の週末に来た時、この人が会うなり、風邪どう？ってきいてくれるの」　（生命ある限り）

・「キッス・シーンが良いわ。素敵よ。それからベッド・シーンが凄いの。まるで裸よ。わたし、頭が痛くなっちゃった。渡辺さんとふたり並んで見ていたらね、渡辺さん慄えているの。ほんとにぶるぶる慄えているの。純情ね。呆れたわ」　（青春の蹉跌）

・「京子の奴、何べんも念を押すんだ、本当に死んだのかって。それじゃなかったら行かないわなんて言うんだ。馬鹿な奴だ」　（恍惚の人）

・「さわぎって、どういうことですか」
「ハツ子がいきなりビールを京子にぶっかけたんです」
「手にしたコップに入っていたビールですね」
「そうです。半分以上あったのを、もろにぶっかけたんで、胸から膝へかけて、かかりました。すると京子も負けずにコップへ手をかけたところへ、ハツ子がかかって行く。髪の毛をつかんで、引き倒そうとする。いや、大変なさわぎでした」　（事件）

次の場合は、話し手の感情・評価性は、形式的には明示されていないが、場面・文脈的に明らかである。

・「それでね、私、差し出がましいようだけど病院へ様子を見に行って来たの

よ」

「有難う」

「早瀬さんを看護婦さんに呼び出して貰って、ちょっと廊下で立ち話しただけだけど、その間でも病室の中から奥さんがけだものみたいな声で早瀬さんを呼び立てるのよ。人が変わったみたいなんですって。・・・・・」

（冬の虹）

このように、話し手に強い情動的反応を引き起こした出来事を非過去形で表現するとすれば、この過去の出来事はまた、過去の一連の出来事のなかで話し手が特に＜焦点＞をあてて、聞き手に伝えたい出来事でもある。次の例に典型的にみられるように、過去形から非過去形への転換によって、＜伝達内容の重要度＞の違いも表現されることになる。

・「覚えていらっしゃる？　ずっと前、夜お芝居を見に行った帰りにね、品川で省線が故障しちゃって、目蒲線の終電に間に合わなくなりそうな時があったでしょう。あの時、品川発の臨時電車が急に別のホームから出ることになったの、覚えていらっしゃる？あの時、階段をまともに上がっていたら乗りそこないそうなんで、私達線路に飛び下りたでしょ。そしたら私が次のホームにのぼらないうちに、京浜線の電車のヘッドライトが見えて、ぐんぐん駅の構内に入って来るのね。私、もう少しでひかれるかと思ったの」

（鸚鵡とクリスマス）

・「お姉さんが死んでるのをみつけたのは私なの」と直子はつづけた。「小学校６年生の秋よ。１１月。雨が降って、どんよりと暗い１日だったわ。そのときお姉さんは高校３年だったわ。私がピアノのレッスンから戻ってくると６時半で、お母さんが夕食の支度していて、もうごはんだからお姉さん呼んできてって言ったの。私は２階に上って、お姉さんの部屋のドアをノックしてごはんよってどなったの。でもね、返事がなくて、しんとしているの。それでなんだか変だなあって思って、もう１度ノックしてそっとドアを開けてみたわけ。寝ちゃったのかしらと思ってね。・・・・」（ノルゥェイの森）

従って、第3に、話し手の感情・評価性の説明としてはたらくノダ文（あるいは終助詞ノ）、または、その出来事に対する話し手の感情移入性を表す～ジャナイ（カ）が付加されている点が特徴的である。この特徴も、地の文＜かたり＞にはないものである。

・「僕の隣に海軍の水兵が二三人いて、時々大きな声で『やっつけろ』『奴らを殺せ』なんてやり出すんだ。・・・・刑事にでも捕まりゃしないかと思ってはらはらしたよ」　（朱を奪うもの）

・「瑠里子がきゃっと凄い声出すんだもの・・・こっちが驚いちゃった」
（女坂）

・「この子も昨日、おけらを持って帰って来たの。『ただいま』って云うから『お帰り』と云ったら、『はい、これ』だって指でぶら下げてあたしの眼の前に突き出すの」
「きゃって云ったね」
「云うわ。靴を脱ぐところまでは何を持って来てもいいけど、そこから先へは虫を持って入ってはいけないと云ってあるのに」　（静物）

・「ちょうどガレ場を降りたところだったな。ひょいと見ると、あいつがいるじゃないか。灌木の上に、普通のアゲハがやるように、こうはねをひろげてべったりととまっているんだ。俺だって初めは本気にできなかったさ。・・・・」　（たにまにて）

・「もっと歩いたと思うわね。田舎でだって、こんなに歩くことないわよ、もう。見覚えのあるところまで戻ってきて、もう大丈夫だと思ったら、お父さんと来たら五日市街道の方へ曲がらずに、ずんずんまっ直ぐ行くじゃないの」
「まあ」　（恍惚の人）

次の場合は、無形式ではあるが、実際の発話においては、特別なイントネーションが伴うであろう。そしてこの場合「驚き」なり「失望」なりの、話し手の感情性が存在しているので「1人乗っているじゃあないか」「留守なんだ」ということが可能である。

・「俺はとにかく怪しいと思うんだ。この前行った時、玄関へ入って行くと、夫人が丁度自動車に乗るところだったんだ。車の中を覗いて見ると、1人乗っている！」（あすなろ物語）

・「オットーの、世の中、しあわせだらけって顔でも見たら、気が晴れるかもしれないと思って、パッサウへ来たんだ。そしたら留守だ。仕方がないから、フランツのところへ行った。・・・・・」（ドナウの旅人）

従って、第4に、話し手自身が直接体験（知覚）した出来事である場合が基本的である。これは、次の最初の2例のように話し手以外のことの場合もあるし、後の2例のように話し手自身のことの場合もある。どちらにしても、直接体験した出来事であるがゆえに、その出来事に対する話し手の感情・評価的反応が生まれてくるわけである。

・「実は先刻妻と少し喧嘩をしてね。それで下らない神経を昂奮させてしまったんです」
「どうして・・・・・」
「妻が私を誤解するのです。それを誤解だと云って聞かせても承知しないのです。つい腹を立てたのです」（こころ）

・「だんだん蕾がふくらんで孔雀が首をもちあげるように上を向いてくるの。そして見ている間に、蕾がどんどん大きくなって、ひらき始めるのよ。12時ごろから咲き始めたの。まっ白で大きな、きれいな花でねえ。1時ごろが盛りだった。3時少し前には、もうしおれてきたの。それをずっと見ていたの。一人だからこんなこと出来るんだわと思いながら」（ウホッホ探検隊）

・「ところが俺はその日ここに帰ってきてから泣いたよ。水のような涙があとからあとから流れでるんだな。自分の泣き顔を見るのがいやで、俺はお祖父さんの能面を壁からはずしてつけてみた。それから鏡をみた。そこにかかっている節木増だ。・・」　（薪能）

・　――― 笑ったろう？

――― そうなんだ、思わず吹き出しちまったら、おかしくておかしくて笑いがとまらないんだ。柳井の奴、怒ったよ。　（草の花）

こうして、過去の出来事の表現にあたっては、過去形が基本的ではあるが、話し手自らが直接体験した出来事を、感情・評価的に表現する場合には非過去形が使用される。これは、過去の出来事の記憶の生々しさ＝発話時における過去の出来事の心理的現存性を表現するものである。自らが直接体験して、強い情動的反応を引き起こされた出来事であるがゆえに、発話時においてもなお心理的にはアクチュアルな出来事なのである。

従って、次のように、過去の出来事についての質問文の場合に非過去形が使用されることはないし、また話し手の直接体験した出来事であっても、感情・評価性に中立的に過去の出来事をとらえる場合には、過去形が使用され、非過去形に転換できないのである。

・「ねえ、僕の年齢におじいさんは何をしていたんだ？」

「そうさな」

「お前は幾つだったかな」

「こんど１７」

「１７か。１７の時の正月の２日に、わしは箱根山を越えた」

「歩いて？」

「歩いてに決まっているじゃないか。その頃はみんな歩いた。女や年寄しか駕籠には乗らなかった」

「東京にいたんだね」

「うん」　（夏草冬濤）

・ —— 最初診察のときは、両親のいるところで問診をされたのですか。
—— そうではありません。Aの希望によって私とAが1対1で話をしました。その間両親は待合室に出ていってもらいました。

（子供たちの復讐）

過去の出来事の表現にあたって、過去形と非過去形のどちらを使用するかは、その出来事にたいする、話し手の心理的態度が決める。客観的＝中立的な場合は本来的な過去形を使うが、感情・評価移入的な場合は非過去形である。あるいは、同じ出来事を、前者では心理的距離をおいて客観的にとらえ、後者では時間的距離が感じられないものとして発話時における心理的アクチュアリティー性を表現するといえよう。

過去形	客観的	心理的距離感あり	直接体験性の有無に中立
非過去形	感情・評価的	心理的距離感なし	直接体験性有

以上のように、①話し手の感情・評価性、②話し手の直接体験性、の2つの相関的要素が重なった場合に、典型的ないわゆる歴史的現在用法としての非過去形が使用されることになるといえるが、この2つの要素のうちのどちらかが欠けても、非過去形が使用される場合もある。

次の場合は、過去の出来事の表現（説明）にあたって、ジェスチャーを伴ないながら非過去形が使用されている。その出来事に対する感情・評価性は必ずしも前面化されてはいない。

・「二人で胡桃を手に持って歩いていたのよ。そうしたら、いく子ちゃんが『あ、1個落とした』って教えてくれたから、すぐに後戻りしたの。それがほんの5、6歩くらい行き過ぎただけなの。そこに道路工事している男の人がいて、『クルミ探しているんだろう』って云うの。『もう食べちゃったよ』って、笑いながら、あたしたちに殻をこうして見せるの。真っ二つに割った殻を」 （静物）

次の場合は、反語的ななじりを表している。話し手が直接体験した出来事ではないが、その過去の出来事に対する話し手の強い非難を前面化している。

・「ぎん、あなたはあちらで本を読んでいたのですか」
「・・・・・・」
「何ということをするのです。本を読む農家の嫁がどこにいます」
（花埋み）

・「高柳くんも同じことをいっているんだよ」
「高柳さんはどうしてそんな嘘をつくんだ？　ぼくは何もしちゃいないのに――」
（監督）

3　以上のように、小説の地の文のみならず、会話文（日常的会話）においても、同じ過去の出来事を表現する場合に、過去形が使用されたり非過去形が使用されたりする。どちらを選択するかを決めるのは、その過去の出来事に対する＜話し手の心理的態度＝距離（モダリティー）＞の相違である。従って、過去形－非過去形の対立は、発話時を基準軸とする＜過去－現在・未来＞という客観的時間的位置の相違であるとともに、話し手と発話対象との心理的距離（心理的現存性の有無）の相違でもある。ここに、テンスとモダリティーとの相関性が認められるわけである。

こうして、非過去形は、一定の条件のもとで、過去時指示性をもつことになる。現代日本語においては、過去形－非過去形のテンス対立が確立してはいるが、モダリティーの変更と相関しつつ、過去形が現在、未来時指示性を、非過去形が過去時指示性をもつようにもなる。そして、話し手自らが直接体験した過去の出来事を、感情・評価移入的に、現在おこっているかのごとく心理的現存性を前面化させながら提示するのは、最も素朴な表現方法であるといえよう。従って、次のような子供の会話にも頻繁にあらわれてくる。

・「お母さんたら、はじめは眠っていたのに、最後は泣いてんの」
「ねえ、感動したの」

「うん」　　（ウホッホ探検隊）

そして、時間副詞によって、あるいは場面・文脈的に、その出来事の過去性を示すことができるとすれば、文法的なテンス対立が存在しなくても、文のテンポラリティーの表現において支障はないとも言えよう。テンスのない言語が存在しても不思議ではない。

なお、小説の地の文に代表されるような＜かたり＞のディスコース（テクスト）における、過去形と非過去形の使用のされ方（選択のあり方）は、以上のような会話文＜はなしあい＞のディスコースの場合とは、質的に異なるものである。＜はなしあい＞では＜発話主体の感情・評価性の有無＞の相違が問題となるが、＜かたり＞では、＜物語世界外の視点か物語世界内の視点か＞あるいは＜語り手の視点か作中人物の視点か＞という、＜文体的技巧＞としての＜視点構造＞の相違が問題となってくる。（この点については、工藤1993を参照されたい。）

が、同時に、＜はなしあい＞でも＜かたり＞でも、過去形と非過去形の使い分けが、＜発話の対象的内容＞と＜話し手、語り手＞との＜心理的距離＞の相違とむすびついている点では共通している。過去形は、時間的＝心理的距離の隔たり性（客観的つきはなし性）を表現し、非過去形は、時間的＝心理的距離の非隔たり性（主観的一体性）を表現する。人間の時間認識は、客観的でもあり、主観的でもあって、テンポラリティーと広義モダリティーとは相関せざるをえないのである。

＜意味・機能から形式へ＞のアプローチをとることは、潜在的な記号体系としての言語の領域そのものではなく、具体的テクスト構造のなかに顕在化する言語の使用を問題とするのである。ここでは、発話状況あるいは場面・文脈との相互作用そのものが中心課題となろう。

（参考文献については、前述の拙論を参照されたい。）

タガログ語のアスペクト

森口恒一

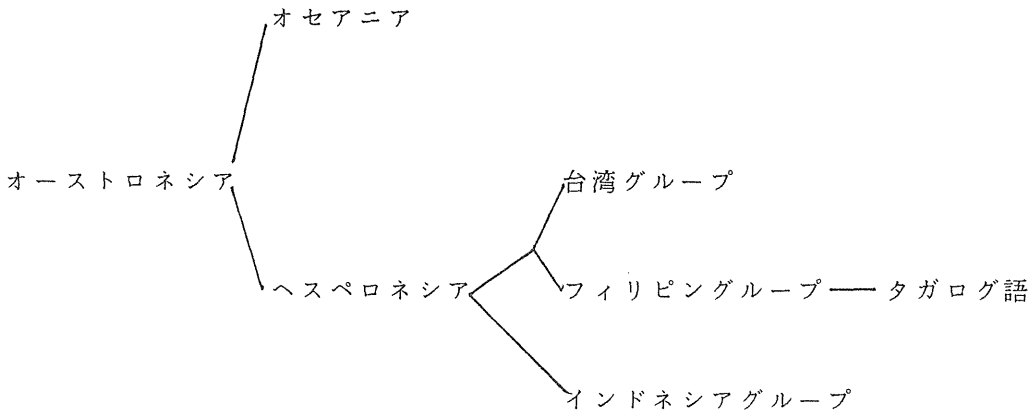
I. タガログ語とは
II. タガログ語のフォーカスとアスペクト
(A) フォーカス
(B) アスペクト
III. タガログ語の動詞分類
IV. フィリピン・台湾諸語のテンスとアスペクト
V. 副詞とアスペクト
VI. 仮定法とアスペクト

I. タガログ語とは

フィリピン共和国の北部のルソン（Luzon）島中部のマニラ地域を中心として使われている言語で、１９３７年に憲法で制定されたフィリピンの国語（共通語）（Lingua Franca）であるPilipino/Filipinoの土台となった言語である。

このタガログ語は他のフィリピンの言語とともに太平洋全体に広がっている一大言語グループのオーストロネシア語族に属している。太平洋地域は、地理的には、インドネシア地域、メラネシア地域、ポリネシア地域、ミクロネシア地域の四地域に分かれる。しかし、言語学的にはオーストロネシア語族は、大きく東と西に分けられ、東の部分をオセアニア語派（メラネシア語派、ポリネシア語派）、西のグループをかつてはインドネシア語派、現在ではヘスペロネシア語派（Hesperonesian＝西部語派）と呼んでいる。インドネシア（ヘスペロネシア）語派の

中の下位区分は確定的なものではない。インドネシアグループ、フィリピングループ、台湾グループの三グループには分かれるとする学者達と、インドネシアグループとフィリピン・台湾グループの２グループに分かれると主張する人たちもある。



フィリピンで使われて言語の数はいまだ確定的ではないが、８５～９０言語位あるといわれて、その下に２～５の方言がある。人類学的な分類と言語学的な分類が一致するとは限らないが、その使用人口の多さに従って、主要言語（Major Languages）と少数言語（Minor Languages）に分けられ、特に使用人口の多い上位八つの言語を八大言語（Eight Major Languages）と呼ぶ。北から示すと

イロカノ語	ルソン島
パンガシナン語	ルソン島
カパンパガン語	ルソン島
タガログ語	ルソン島
ビコル語	ルソン島
ワライ語	サマル島、レイテ島
セブアノ語	セブー島、ボホル島、ミンダナオ島等
ヒリガイノン語	ネグロス島、ギマラス島

である。かつてはセブアノ語が使用人口が一位であったが、現在は全国的な学校教育の普及で国語であるピリピノ語（タガログ語）の使用人口が増え、人口の点ではタガログ語が一位に、そして、セブアノ語が二位になった。

タガログ語は、方言がいくつかあるが、未だ完全な方言調査は行われてはいない。現在のところは、南部地域のMarinduque・Boak方言、Tayabas方言、マニラ地域のマニラ・中央方言、西南のLaguna・Batangas方言、北のBulakan方言、東のRizal方言などが認められている。

ところで、フィリピンは１６世紀以降１８９９年までスペインの植民地になっていた。本国から遠く離れたヨーロッパから来た支配階級のスペイン人はほんの少数であった。このスペイン人達のフィリピンの支配方法は、その当時、村・部族単位で独立していて、部族間の言語差が激しいという状況を利用したものである。人間というものは、ことばが通じない間がらであるということは、友好的な関係を保てず、お互いに反目するようになる。そして、そのことは、フィリピンのような多言語社会では全土を統一する妨げとなっていた。ところが、逆にスペイン人達はこれを利用して、村単位とでもいえる各部族の統一を促進するような共通語にスペイン語がならないようにスペイン語教育をするという政策はとらず、各部族をお互いに反目し合うようにした。しかし、現地人とスペイン人はある意志疎通の手段を持たなければならなかったために、スペイン語とタガログ語、または、他のフィリピンの言語とのピジン／クリオール（混成語）が、自然に出来上がった。これがチャバカノ語（Chabacano)である。この中でマニラの南のカヴィーテ（Cavite)で使われるCaviteñoは、タガログ語とスペイン語から出来上がったクリオール[2)]である。

一方、１９００年以降アメリカがフィリピンを統治し始めると、スペインとは逆に民主主義を広めるために、フィリピン全土に小学校を建ててアメリカ人の教師を配置し、英語を教えるようになった。第二次世界大戦以降、アメリカが引き上げた後でも、現在までその英語の地位は確固たるものとなっている。しかし、英語の母語使用者がすべての人を教えるわけでもなく、フィリピン独自の英語が発達し、マニラあたりでは英語とタガログ語が混ざったマニラ・タガログ、または、タガリッシュ（Tagalish)というものが発達してきた。

II. タガログ語のフォーカスとアスペクト

タガログ語は、類型論的には動詞が最初に来ればそのほかの名詞句は原則的には順番は無関係[3]の言語である。すなわち、V－O－S、V－S－Oどちらでも良い。それゆえ

Kumain na ang tao ng lumpia.[4]
（食べた すでに は 人 を 春巻き）
"その人は、春巻きを食べてしまった。"

という語順でも

Kumain na ng lumpia ang tao.
（食べた すでに を 春巻き は 人）
"春巻きをその人は食べてしまった。"

も原則的には認められうる語順である。

タガログ語で特徴的な要素で、最も興味深い現象は、動詞である。この動詞に関してまず第一に注目することは、動詞的な意味を持つ語彙がすべて動詞というカテゴリーに入らないということである。確かに、日本語でもいわゆる動詞と形容動詞という分類があるが、このような分類ではなく別の基準によって分類されている。その基準とは、次に述べるフォーカスとアスペクトである。

（A） フォーカス（Focus）

ヨーロッパの言語などは、能動態と受動態の対立により主語の変化を行っているが、フォーカスは、タガログ語をも含めた他のフィリピン・台湾諸語すべてが持っている共通の言語現象で、その中心は、「主題」である。この規則は、日本

語の「は」と類似した形態を示すが、フィリピン・台湾諸語では名詞句の問題だけではなく、動詞との関係があり、次のようなものである。

・ 主格フォーカス

Kumain na ako ng mansanas.
(食べた すでに 私は を リンゴ)
"私は、リンゴを食べた。"

Naglabas ako ng lapis.
(取り出した 私は を 鉛筆)
"私は、鉛筆を取り出した。"

Nangingisda si Jose sa baybayin.
(漁をしている ホセは で 海岸)
"ホセは、海岸で漁をしている。"

Nakakasulat ang anak ko sa pupitre.
(書くことができる は 子供 私の で 机)
"私の子供は、机で書く事ができる。"

・ 目的格フォーカス

Kinain ko na ang mansanas.
(食べた 私 すでに は リンゴ)
"りんごは、わたしが食べた。"

(Subjective Focus = Kumain na ako ng mansanas.)
(食べた もう 私は を リンゴ)

Inilabas ko ang lapis.
（出した　私　は　鉛筆）
"鉛筆は、私が出した。"

(Subjective Focus = Naglabas ako ng lapis.)
（出した 私は　を 鉛筆）

・ 方向格フォーカス

Binayaran niya ang bangko.
（支払った　彼（女）　は　銀行）
"銀行（へ）は、彼が支払をした。"

(Subjective Focus = Nagbayad siya sa bangko.)
（支払った　彼（女）は　へ　銀行）

Inabutan niya ako ng sulat.
（手渡した　彼（女）　私は　を　手紙）
"私（へ）は、彼女が手紙を渡した。"

(Subjective Focus = Nag-abot siya sa akin ng sulat.)
（渡した　彼（女）は　に 私　を　手紙）

・ 所格フォーカス

Pinagsulatan ko sa bata ng liham ang mesa.
（書いた　私　へ　子供　を　手紙　は　テーブル）
"テーブルでは、私が子供に手紙を書いた。"

(Subjective Focus = Sumulat ako sa bata ng liham sa mesa.)
(書いた 私は に 子供 を 手紙 で テーブル)

・ 恩恵格フォーカス

Ipinag-ihaw ni Toni ng isda si Eddie.
(焼いた トニー を 魚 エディーは)
"エディーのためには、トニーが魚を焼いて(やった)。"

(Subjective Focus = Nag-ihaw si Toni ng isda para kay Eddie.)
(焼いた トニーは を 魚 ために エディー)

・ 具格フォーカス

Ipinangguhit niya ng larawan ang lapis.
(描いた 彼(女) を 絵 は 鉛筆)
"鉛筆では、絵を彼(女)書いた。"

(Subjective Focus = Gumuhit siya ng larawan
(描いた 彼(女)は を 絵
sa pamamangitan ng lapis.)
で 鉛筆

・ 理由格フォーカス

Ikinayaman niya ang sweepstakes.
(金持ちになった 彼(女) は 競馬)
"競馬ゆえに、 彼(女)が金持ちになった。"

(Subjective Focus = Yumaman siya dahil sa sweepstakes.)
（金持ちになった 彼（女） ゆえに 競馬）

・ 話題格フォーカス[6]

Pinag-awayan nila ang pera.
（口論した 彼（女）達 は お金）
"お金については、彼（女）達が口論した。"

(Subjective Focus = Nag-away sila tungkol sa pera.)
（口論した 彼らは ついて お金）

（B） アスペクト（Ａｓｐｅｃｔ）

タガログ語は、アスペクト、すなわち、ある出来事が「終わってしまった」か、「今継続中」であるか、それとも「これから行われる」かという基準によって動詞の形態的変化がある。それはフォーカスの変化にともなって次のように変化する。

・ 主格フォーカス

	飲む	帰る
基本形	uminom	bumalik
完了	uminom	bumalik
未完了	umiinom	bumabalik
未来	iinom	babalik

	たくさん飲む	買う
基本形	mag-inom	magtinda
完了	nag-inom	nagtinda
未完了	nag-iinom	nagtitinda
未来	mag-iinom	magtitinda

	散歩できる	
基本形	makapagpasyal	
完了	nakapagpasyal	
未完了	nakakapagpasyal	nakapagpapasyal
未来	makakapagpasyal	makapagpapasyal

	借りる	商う (√kalakal)[7]
基本形	manghiram	mangalakal
完了	nanghiram	nangalakal
未完了	nanghihiram	nangangalakal
未来	manghihiram	mangangalakal

・ 目的格フォーカス

	待つ	歌う	料理する	
基本形	hintayin	awitin	lutuin	
完了	hinintay	inawit	linuto	niluto[8]
未完了	hinihintay	inaawit	linuluto	niluluto
未来	hihintayin	aawitin	lulutuin	

・ 方向格フォーカス

	渡す	手紙を出す／書く
基本形	abutan	sulatan
完了	inabutan	sinulatan
未完了	inaabutan	sinusulatan
未来	aabutan	susulatan

・ 所格フォーカス

	書く	ボートを漕ぐ　(√bangka)[9]
基本形	pagsulatan	pamangkaan
完了	pinagsulatan	pinamangkaan
未完了	pinagsusulatan	pinamamangkaan
未来	pagsusulatan	pagmamangkaan

・ 恩恵格フォーカス

	臼で搗く	印刷する
基本形	ibayo	ipaglimbag
完了	ibinayo	ipinaglimbag
未完了	ibinabayo	ipinaglilimbag
未来	ibabayo	ipaglilimbag

・ 具格フォーカス

	描く	散歩する (√pasyal)[10]
基本形	ipangguhit	ipamasyal
完了	ipinangguhit	ipinamasyal
未完了	ipinangguguhit	ipinamamasyal
未来	ipangguguhit	ipamamasyal

・ 話題格フォーカス

	議論する
基本形	pag-awayan
完了	pinag-awayan
未完了	pinag-aawayan
未来	pag-aawayan

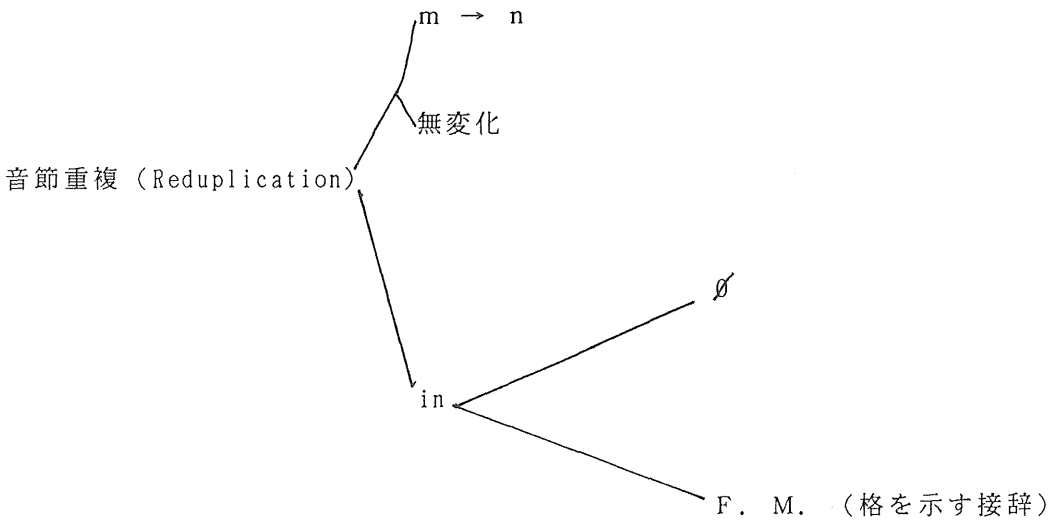
一方、上記のような規則的な「終わった」か、「今継続中」か、「これから行う予定」かという基準にほかに、「今ちょうど終わったところだ」という近完了(Recent Perfective)という形式がある。しかし、 前に述べたように各フォーカスにそれぞれアスペクト形式があったが、この形式は、主格フォーカスしかない。

Kumain na ako.
(食べた すでに 私は)
"私は、すでに食べた。"

Kakain ko lamang.
(食べた 私 ちょうど)
"私は、ちょうど食べ終わったところです。"

どんな言語でも動詞の変化に不規則変化というものがあるのが、ふつうであるが、タガログ語のアスペクトの変化は、すべて例外無く規則的な変化をしている。一見不規則に見えるものでもある一定の規則的な音変化の結果であり、次のようにまとめることができる。

すべての本動詞に共通する変化は、未完了形、未来形では必ず音節重複（Reduplication）が行われ、主格フォーカスは、完了形と未完了形では m → n の音変化を起こすか無変化である一方、主格以外のフォーカスは、-in/-in-/-in/ni-が使われる。また、主格以外のフォーカスの中で、目的格フォーカスと目的格フォーカス以外の違いは、目的格フォーカスは、in-/-in-/-in/ni-だけであるが、それ以外の格では、必ずどの格にフォーカスが当たっているか示すそれぞれの格と関係する接辞（Focus Marker）が付加される。図にすると次のようになる。



・ 音節重複

	主格フォーカス	主格フォーカス 以外	
		目的格フォーカス	目的格フォーカス以外
完了	なし	なし	なし
未完了	あり	あり	あり
未来	あり	あり	あり

・ 音変化または消失

	主格フォーカス	主格フォーカス 以外	
		目的格フォーカス	目的格フォーカス以外
完了	m → n um	-in-/in-	-in-/in- + F.M.
未完了	m → n um	-in-/in-	-in-/in- + F.M.
未来	m ∅	-in	∅ F.M.
	(mag-, mang-, ma-, maka-, maki-)		(-an, i-, /ipag- ipang-, ika-, pag- -an)

ＩＩＩ．　タガログ語の動詞分類

ＩＩ．で述べた基準はタガログ語の動詞に特徴的な基準であるが、必ずしも意味的に動詞であると考えられるものでもこの基準が当てはまらないものがある。この基準が当てはまる動詞的な意味を持つものを本動詞とすると、上記の基準が当てはまらないが、意味は動詞的である動詞群を、「疑似動詞」（Pseudoverb)と呼び、そのグループに含まれるのが、gusto（好き）、ayaw（嫌い）；maaari, puwede（できる）；kailangan, nais（必要がある）；may, mayroon（ある）；wala（ない）などである。

アスペクトの変化の無い例としては，次のようなものがある。

Walang　kotse si Ernesto　ngayon.
（ない+L 車　エルネストは　今）"エルネストは、今車がない。"
Walang　kotse si Ernesto　noon.
（ない+L 車　エルネストは　かつて）"エルネストは、かつて車がなかった。"
Walang　kotse si Ernesto　bukas.
（ない+L 車　エルネストは 明日）"エルネストは、明日車が無いだろう。"

May　trabaho siya　ngayon.
（ある　仕事　彼（女）は 今）　"彼（女）は、今、仕事がある。"
May　trabaho siya　noon.
（ある　仕事　彼（女）は かつて）"彼（女）は、かつて、仕事があった。"
May　trabaho siya　bukas.
（ある　仕事　彼（女）は 明日）"彼（女）は、明日、仕事があるだろう。"

Gusto ko iyon ngayon.
(好き 私 あれ 今) "私は、あれが今欲しい。"
Gusto ko iyon noon.
(好き 私 あれ かつて) "私は、あれがかつて欲しかった。"
Gusto ko iyon bukas.
(好き 私 あれ 今) "私は、あれが明日欲しくなるだろう。"

Kailangan ko iyon ngayon.
(必要 私 あれ 今) "私は、今あれが必要だ。"

Kailangan ko iyon noon.
(必要 私 あれ かつて) "私は、かつてあれが必要だった。"
Kailangan ko iyon bukas.
(必要 私 あれ 明日) "私は、明日あれが必要であろう。"

Maaaring
(出来る)
Puwedeng
(出来る)
konduktor si Antonio ngayon. "ｱﾝﾄﾆｵは、今、指揮者になれる。"
(指揮者 ｱﾝﾄﾆｵ 今／今日)

Maaaring
(出来る)
Puwedeng
(出来る)
konduktor si Antonio noon. "ｱﾝﾄﾆｵは、かつて指揮者なれた。"
(指揮者 ｱﾝﾄﾆｵ かつて)

Maaaring
（出来る）

Puwedeng
（出来る）

konduktor si Antonio bukas.　　"ｱﾝﾄﾆｵは、明日指揮者
（指揮者　ｱﾝﾄﾆｵ　明日）　　なれるだろう。"

のように明かに過去を表現する副詞を付加しても、「疑似動詞」自体の変化はない。

上記のもののうちで「出来る」(puwede, maaari)等は、可能を表現するｍａ－、ｍａｋａ－という接辞を動詞語根に付加すれば、同じ意味が表現出来る。その場合は、フォーカスによる変化もアスペクトの変化もある。

Puwede
（出来る）

Maaari
（出来る）

siyang　kumain ng mangga.
（彼（女）+L 食べた を マンゴ）

"私は、マンゴを食べることができた。"

という文章も

Nakakain　siya　ng mangga.
（食べられた 彼（女）は を マンゴ）
"彼（女）は、マンゴを食べられた。"

Nakakakain siya ng mangga.
（食べられる 彼（女）は を マンゴ）
"彼（女）は、マンゴを食べられる。"

Makakakain siya ng mangga.
（食べられるだろう 彼（女）は を マンゴ）
"彼（女）は、マンゴを食べられる。"

本動詞のフォーカスの変化は、名詞句をＡＮＧクラスにして動詞にどの格／名詞句が取り出されたかを示す接辞が付加されるということであるが、[12]「擬似動詞」の場合には、名詞句に関する変化はあるが、「擬似動詞」自体の変化はない。

Gusto ni Pedro ng lapis.
（欲しい ペドロ 鉛筆）
"ペドロは、（どんな形の物でも）鉛筆が欲しい。"

Gusto ni Pedro ang lapis.
（欲しい ペドロ は 鉛筆）
"ペドロが、その鉛筆は欲しい。"

Gusto ng lapis si Pedro.
（欲しい 鉛筆 ペドロは）
"ペドロは、鉛筆が欲しい。"

Gusto ni Pedro ang titser.
（好き ペドロ 先生）
"ペドロは、その先生は好きである。"

Gusto ni Pedro sa titser.

（好き　ペドロ　その先生）

"ペドロは、その先生は好きである。"

上記の例文を見てもわかるように、名詞句の主題化の変化は起こすが、動詞自体の変化は、何もなく、名詞句の変化のみで「主題」を表現するという日本語の「は」の規則と非常に似通っている。

ＩＶ．　他のフィリピン・台湾諸語のアスペクトとテンス

フィリピン・台湾諸語すべてに完了・未完了・未来という３種の形式が存在するとは限らないし、アスペクトだけではなくテンスの体系を持つ言語もある。

一般的にフィリピン・台湾の言語は、確かにアスペクト体系のみを持つ言語が大半である。そして、その対立は、完了（行為が終わった）：未完了（行為が継続中）の対立が主であり、未来形（これから行う予定、また、仮定的な行為）は、必ずしも持っていない言語が多い。また、タガログ語で共通してみられる音節重複をアスペクトの変化を示すためには使わない言語もある。

アスペクトの変化の形式としては、タガログ語タイプの言語、すなわち、

１．　音節重複

２．　ｍ　→　ｎ　の変化

３．　in-/-in-/-in の使用

という変化を起こし、それも、

主格フォーカス

ｍ－ｎの音変化

音節重複

その他の格のフォーカス

in／ni　の付加

音節重複

と分けられるタイプがある一方、主格フォーカスと他の格のフォーカスとのグループにならず、共通に

in/ni　の付加

（音節重複）

という形の変化でアスペクトの変化が行われる。

たとえば、台湾のヤミ語では

Nikoman si Mapapo so wakay.

（食べた　マパポ を　さつまいも）

"マパポは、さつまいもを食べた。"

Yakoman　si Mapapo so wakay.

（食べている　マパポ を さつまいも）

"マパポは、さつまいもを（今）食べている（ところです）。"

となり、また、同じ言語に属するが、フィリピン側のイヴァタン語の南方言では、

Gomintos　o　nyoy do oho na.

（落ちた　は　椰子 へ 頭　彼（女）の）

"椰子が、彼（女）の頭に落ちた。"

のように、-om-という主格フォーカスを表す接中辞と-in-またはni-というアスペクト／目的格フォーカスを示す接辞を使う場合もある。また、ヤミ語では、神話やおとぎ話しなどの特殊な場合には、動詞の変化がまったく無く、副詞的な語彙

を使って、動詞自体の変化は重要視されてはいない。たとえば、

Tay(to) ako　koman.
（いる　私は　食べる）　　"私は、（今）食べている。"

Teyka　　rana　ako　koman.　"私は、食べ終わった。"
（終わった　すでに 私は　食べる）

のようにtayto（ーしている）、teyka（ーしてしまった）という副詞を使っている。

以上のことから、タガログ語や他の言語の現象を見てみると、in/niという接頭辞が非常に重要な役をなしていて、m → nという変化もヤミ語やイヴァタン語南方言からもわかるように、in/niが関与しているようであり、inが目的格フォーカスにタガログ語では使われることやアスペクトを示すマーカーになるということは、「目的格フォーカス」の意味形態と「完了」、すなわち、「終わってしまった」という意味との間に何か関係があるように思われる。そして、類型論的には「完了」を表現する接辞と目的格フォーカスの接辞の同一性は、能格的な構造を彷彿とさせるものがある。

一方、フィリピン・台湾諸語の中でテンスの体系を持たない言語ばかりではない。セブアノ語では、テンスとしてＰａｓｔ（過去）：Ｆｕｔｕｒｅ（未来）の対立と完了（Ｐｕｎｃｔｕａｌ）：未完了（Ｄｕｒａｔｉｖｅ）の二つの体系のコンビネーションがある。

セブアノ語のテンス・アスペクトの体系は、フィリピン・台湾諸語では非常に例外的な体系を持つ言語であると考えられ、以下に示すように、基本的なアスペクトの体系に、特別なテンスを表現する方法を作りだしたことにその特徴がある。

セブアノ語のアスペクト・テンスの特徴は、完了、未完了のアスペクトの対立は、他のフィリピン・台湾諸語と同じような規則を使っているが、テンスに関しては、異なる接辞をテンス用に当てはめて使っているということである。

	Future	Past
Subjective Focus		
Punctual	mu-	mi-, ni-, ning-, ming-
Durative	mag-, maga-	nag-, naga-, ga-
Objective Focus		
Punctual	-un	gi-
Durative	pag-un	gina-
Locative Focus		
Punctual	-an	gi-an
Durative	pag-an	gina- -an
Instrumental Focus		
Punctual	i-	gi-an
Durative	iga-	gina-

(Wolf(1972)より)

V. 副詞とアスペクト

いくら文法形式でテンスがないといっても、言語の発話で過去に関する情報を盛り込むまなければ、我々は言語生活に不便を感じる。テンスの体系のない言語の場合は、過去、現在、（未来）を表現するために副詞を使うのである。タガロ

グ語でいわゆる副詞と考えられているものは、２種類に分けられるれる。文のなかで置かれる位置が非常に問題になる小詞（particle）とその位置が問題にならない純粋の副詞である。

小詞のグループに属するものは、副詞だけではなく、代名詞も含まれる。そのなかで時間と関係ある副詞は、[13]

ｎａ：　すでに、もう

ｐａ：　まだ、

だけである。しかし、日本語の訳がすべてのタガログ語の「ｎａ」、「ｐａ」の意味範囲と一致しないし、あらゆるアスペクトとともに「ｎａ」、「ｐａ」は、使われいろいろと意味の変化をする。

・完了

Kumain　na　ako.
（食べた　もう　私は）
"私は、もう食べてしまいました。）

?Kumain　pa　ako.
（食べた　まだ　私は）

・未完了

Kumakain　na　ako.
（食べている　もう　私は）
"私は、今食べています。"

Kumakain　　pa　ako.

（食べている まだ 私は）

"私は、まだ食べています。"

・未来形

?*Kakain　　na　ako.

（食べるだろう もう 私は）

kakain　　pa　ako.

（食べるだろう まだ 私は）

"まだ、食べるつもりです。"

・命令形

Kumain　　ka　　na.

（食べなさい お前　もう）

"食べてしまいなさい。"

Kumain　　ka　　pa.

（食べなさい お前　もう）

"もっと／まだたべなさい。"

この「ｎａ」、「ｐａ」の意味範囲を考えると、

ｎａ：　1.　終わってしまった

　　2.　今まだ続いているが、将来的には続ける予定がない。

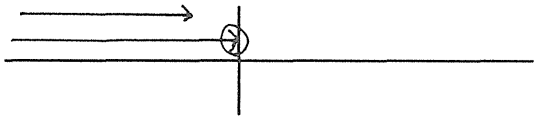
　　3.　または、過去の出来事の結果が現在まで続いている。

ｐａ：　1.　現在まで続いていて、将来的にも続ける予定。

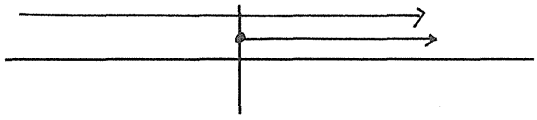
　　2.　これから行う予定。

図式化すると次のようになる。

ｎａ：



ｐａ：



一方、時間と関係する一般的な副詞は、語順の問題はなくなる。

・　kamakalawa：　一昨日

Pumunta　ako　sa　Tokyo kamakalaw.

（行った　私は　へ　東京　一昨日）

”一昨日、私は、東京へ行った。”

・ kahapon： 昨日

Pumunta ako sa Tokyo kahapon.
（行った 私は へ 東京 昨日）
"昨日、私は東京に行った。"

・ kagabi： 昨晩

Pumunta ako sa Tokyo kagabi.
（行った 私は へ 東京 昨晩）
"昨晩、私は東京へ行った。"

・ ngayon： 今日、今

Pumunta
（行った）
Pumupunta
（行っている
Pupunta
（行くだろう）

siya sa Tokyo ngayon.
彼（女） へ 東京 今／今日）

"彼（女）は、東京に今日行った。"
"彼（女）は、今／今日東京に行っている。"
"彼（女）は、今日東京に行くだろう。"

・ bukas： 明日

Pupunta ako sa Tokyo bukas.
（行くだろう へ 東京 明日）
"私は、今日東京へ行くだろう。"

・ noon： かつて

Pumunta
(行った)
Pumupunta
(行っていた)

ako sa Tokyo noon.
(私は へ 東京 かつて)

"私は、かつて東京に行った。"
"私は、かつて東京に行っていた。"

・ kanina： さっき

Pumunta ako sa Tokyo kanina.
(行った 私は へ 東京 さっき)
"私は、さっき東京に行った。"

・ mamaya： 後で

Pupunta ako sa Tokyo mamaya.
(行くだろう 私は へ 東京 後で)
"私は、あとで東京に行くだろう。"

・ nang Lingo： （日曜日）に

Bakit siya
（なぜ 彼（女）

nagtrabaho
（仕事した）
nagtatrabaho
（仕事をしている）
magtatrabaho
（仕事をするだろう）

nang Lingo?
（に 日曜日）

"なぜ、彼（女）は、日曜日に仕事を
したのだろう。"
しているのだろう。"
するのだろう。"

・ noong Lingo： 前の（日曜日）に

Pumunta ako sa Tokyo noong Lingo.
（行った 私は へ 東京 前の 日曜日）
"私は、この前の日曜日東京へ行った。"

・ sa Lingo：（次の）日曜日に

Pumupunta
（行っている）
Pupunta
（行くだろう）

ako sa Tokyo sa Lingo.
（私は へ 東京 次の日曜日）

"私は、次の日曜日に東京へ
行っている。"
行くだろう。"

・ minsan： かつて、一度

Nagbakasyon si Pedrong minsan sa Baguio.
(休暇をとった ペドロは 一度 へ バギオ)
"ペドロは、かつてバギオで休暇をとった。"

・ madalas： しばしば
palagi： いつも

Nagbakasyon
(休暇をとった
Nagbabakasyon
(休暇をとっている

si Pedrong
(ペドロは

madalas
しばしば)
palagi
いつも)

sa Baguio.
で バギオ)

"ペドロは、しばしば／いつもバギオで休暇をとって { いた。" / いる。" }

・ hanggang： まで

Tumira ako roon hanggang 1988.
(住んだ 私は あそこ まで)
"わたしは、１９８８年まであそこに住んだ。"

Magtatrabaho siya hanggang sa Lunes.
(仕事をするだろう 彼（女） まで 月曜日)
"彼（女）は、月曜日まで仕事をするだろう。"

・ buhat/mula/umpisa： から、以来

Nag-aral
（勉強した）
Nag-aaral
（勉強している）
Mag-aaral
（勉強するだろう）

sila buhat/mula/umpisa (nang) alas otso.
彼ら　から　時　8）

"彼らは、八時から
勉強した。"
勉強している。"
勉強するだろう。"

・ kaha-kahapon： ちょうど昨日

Kaha-kahapon lang ay pumunta ako sa Tokyo.
（ちょうど昨日　ほんの　行った　私は　へ　東京）
"ちょうど昨日、私は、東京に行った。"

・ kani-kanina： ほんのちょっと前

Kani-kanina lamang ay pumunta siya sa Tokyo.
（ちょっとまえ　ほんの　行った　彼（女）　へ　東京へ）
"ちょっと前に彼（女）は東京に行った。"

・ ngayon-ngayon： たった今

Ngayon-ngayan lamang natapos ang miting.
（たった今　ほんの　終わった　は　会合）
"たった今会合が終わったところだ。"

・ maya-maya： すぐに、すぐ後で

Aalis ako maya-maya/mamaya.
（出発するだろう 私は すぐ後に）
"私は、すぐ後に出発するだろう。"

以上のような時間に関する副詞は、それ自体の持つ意味的な制限は無いが、原則的には完了、未完了、未来との結合の可能性はある。

副詞というものは、句であらわれる場合だけではなく、文であらわれる場合もある。

・ kung： もし、ーとき

Kung papayagan siya ng Nanay,
（もし 許可するだろう 彼（女） 母

pupunta siya sa Maynila.
行くだろう 彼（女） へ マニラ）

"もし、母親が彼（女）に許可を与えるならば、
彼（女）は、マニラへ行くだろう。"

kapag： もし

kapag
Hindi ako tutugtog ng piyano, natutulog ang Tatay.
kung
（ない 私は 演奏するだろう を ピアノ もし 寝ている 父）

"もし、父親が寝ているならば、私は、ピアノを弾かない。"

(Ka)pag(ka) nakita ko siya,
（もし 見た／会った 私 彼（女）
sasabihin ko sa kaniya ang nangyari.
言うだろう 私 に 彼（女） 出来事）
"もし、彼（女）にあったら、その出来事を彼（女）に話すだろう。

Bumili ka ng gatas,
（買いなさい おまえ を ミルク
(ka)pa(ka) nagpunta ka sa palengke.
もし 行った おまえ へ 市場）
"もし、市場に行ったなら、ミルクを買いなさい。"

・ bago： まえに

Bago siya { mag-aral（勉強する（基本形））／nag-aaral（勉強している） } ng liksyon,
（前に 彼（女） を レッスン
nagbabasa muna siya ng dyaryo.
（読んでいる ともかく 彼（女） を 新聞）

"彼（女）は、レッスンを勉強する前に、新聞を読んでいる。"

Bago natulog ang mga bata, uminom sila ng gatas.
（前に 寝た は 達 子供 飲んだ 彼らは を ミルク）
"寝る前に子供達は、ミルクを飲んでいる。"

・ matapos/pagakatapos：後で

Uuwi
（帰るだろう
Umuuwi
（帰っている
Umuwi
（帰る（基本形）

na siya

matapos (na) basahin (niya)
後で 読む）

pagkatapos niyang basahin
後で 彼（女）+L 読む）

ang mga sulat.
pl. 手紙）

"手紙を読んだ後で、彼（女）は、 帰るだろう。"

・ haba/hangga't： ーしている間

Habang nagtatrabaho si Juan, umaawit siya.
（間に 働いている フアン 歌っている）
"フアンは、働いている間、歌っている。"

・ hangang： ーまで

Hanggang magkaroon din sila ng sariling bahay,
（まで 得る また 彼ら 自分の 家）
（基本形）

tumira
（住んだ）
（tumitira
（住んでいた
titira
（住むだろう）

sila sa amin.
彼ら に 我々）

"彼らも、自分の家を手に入れるまでは、我々と一緒に

住んでいた。"
住んでいる。"
住んでいるだろう。"

・ ngayon at/ngayong： ーしてしまった今

Makakatulong na siya ngayan at / ngayong nagsimula, 始めた) / nagsisimula, 始めている) / magsisimula, 始めるだろう)
(助けることが しまう 彼(女) 今では
出来るだろう

siya ng paggawa.
彼(女) を 仕事)

"彼(女)は、仕事を始め た / ている / ようとしている 今、

助ける事が出来るだろう。"

・ tuwi： ーするときは、いつも

Tuwing
(時はいつでも

nakikita
(見ている)

makikita
(見るだろう)

ko iyon, naaalala ko sila.
私 あれ 思い出す 私 彼ら)

"あれを、見ると、いつも私は彼らを思い出す。"

・ magbuhat： 以来

(Mag)buhat nang
(以来

mamatay
(死ぬ(基本形))

namatay
(死んだ)

ang asawa niya,
連れ合い 彼(女)

hindi na siya nakagawa ng trabaho.
無い もう 彼(女) した を 仕事)

"彼(女)の連れ合いが死んでから、彼(女)は、もう仕事をしない。"

・ nang： ーするとすぐ

Nang makita ko siya,
(するとすぐに 見られる(基本形) 私 彼(女)が

nakilala ko siya agad.
わかった 私 彼(女) すぐに)

"私が彼（女）を見たとき、すぐに彼女である事がわかった。"

Nang nagtatrabaho siya sa pabrika, malaki ang sweldo niya.
（時 働いているとき 彼（女） で 工場 大きい は 月給 彼（女）の）
"工場で働いているときには、彼（女）の月給は多かった。"

Nang aalis na ako, tinawag niya ako.
（時 出るだろう もう 私 訪れた 彼（女） 私）
"私が出発するときに、彼が私を訪問した。"

ＶＩ． ＢＥ動詞的表現

英語などでは、形式的には現在、過去、そして、完了、未完了の存在動詞がある。

I am a stedent.
I was a student.
I will be a student.
I have been a atudent.
I had been a student.

また、日本語でも

私は、東京 ｛ にいた。
にいる
にいるだろう。

のように（完了）、過去、現在、（未完了）、未来のような存在動詞のテンス・アスペクトの変化がある。しかし、タガログ語を含むフィリピン・台湾諸語に

おいては共通して、英語のBE動詞にあたるコピュラ動詞がない。大体が語順で決定されるが、形容詞などの場合には、Linkerの有無が、句であるか、文であるかを見分ける基準となる。たとえば

赤い花は　ang　pulang　bulaklak
　　は　赤い+L　花

ang　bulaklak　na　pula
は　花　L　赤い

であるのに対して

花は赤い。　Pula　ang　bulaklak
　　赤い　は　花

また、主題を強調すると

Ang bulaklak ay pula.
（は　花　　赤い）

となる。ここでは、「ay」という単語が一見BE動詞的な要素持っているように思えるが、

Kumain　ako.
（食べた　私は）　　"私は、食べた。"

の「私」を強調すると

Ako ay kumain.

となる。そこで、アスペクトの問題であるが、Be動詞の表現はその意味からアスペクト的には状態、すなわち、未完了的意味あいを持つものであり、もし、過去であれば過去の未完了形となる。それゆえ、ここで問題になるのは、現在か、過去かという問題である。

Sa　Tokyo　si Tentay.
（に　東京　　テンタイ）　"テンタイは、東京にい｛る。"／た。"｝

Estudyante　siya.
（学生　　彼）　"彼は、学生｛です。"／でした。"｝

Maganda　siya.
（美しい　彼（女）　"彼（女）は、美し｛い。"／かった。"｝

上記の文章を「今」・「今日」という部分を強調すると

Sa　Tokyo　si Tentay　ngayon.
（に　東京　　テンタイ　今／今日）
"テンタイは、今／今日東京にいる。"

Estudyante siya　ngayon.
（学生　　彼（女）　今／今日）
"彼（女）は、今、学生である。"

Maganda　siya　ngayon.
（美しい　彼（女）　今・今日）
"今・今日、彼（女）は美しい。"

となるし、過去を強調すると

Sa　Tokyo　si Tentay　noon.
（に　東京　テンタイ　かつて）
"テンタイは、かつて東京にいた。"

Estudyante siya　noon.
（学生　彼（女）　かつて）
"彼（女）は、かつて学生だった。"

Maganda　siya　noon.
（美しい　彼（女）　かつて）
"彼（女）は、かつて美しかった。"

となり、副詞の部分だけが過去であるか、現在であるかを示す。
また、強調の形でも同じである。

Si Tentay ay sa Tokyo
- ngayon.（今／今日）　"テンタイは今東京にいる。"
- noon.（かつて）　"テンタイは勝手東京にいた。"

Siya　ay estudyante（彼（女）　学生）
- ngayon.（今／今日）　"彼（女）は、今学生である。"
- noon.（かつて）　"彼（女）は、かつて学生だった。"

Siya　　ay maganda　ngayon.
（彼（女）　　美しい　今日）"彼（女）は、今、美しい。"
　　noon
　　（かつて）"彼（女）は、かつて美しかった。"

となる。また、副詞の部分と主語を強調すると、次のようになる。

Bukas ay kami　ay pupunta　sa Laoag.
（明日　我々は　行くだろう　へ ラワッグ）
"明日は、我々はラワッグへ行くだろう。）

この事から「ay」は、論理的な関係を示すのではなく、強調していることを示すもので、動詞的な要素は含まない。また、「ay」とポーズとは、交換可能なものである。

Bukas, kami, pupunta sa Laoag.

ＶＩＩ．　仮定法とアスペクト

次にテンス・アスペクトでヨーロッパの言語で問題になる仮定法、または、接続法の問題である。英語やドイツ語の接続法は、基本的にはテンスを一つ前のものを使い、その中で過去を表現する場合には完了形を使う。しかし、日本語の場合は、

もし私が、知っていたらば、
- 教えてやるのに。
- 教えてやったのに

ように、従属節は過去の「た」を使い、主節のほうで過去形を使い過去の仮定を、現在形を使い、現在の仮定を示す。また、「もし」という接続詞と動詞の変化だけではなく「ならば」と「のに」というものに頼って仮定の表現をしている。

これと同じようにタガログ語でも仮定法の形は、動詞に頼るのではなく、もし「kung」という接続詞と「sana」という仮定を表現する小詞を使う。

Kung ibon lang sana ako, makakalipad ako sa iyo.
(もし 鳥 ただ 私は 飛べるだろう 私は へ あなた)
"もし、私が鳥だったならば、
あなたの所に飛んで行くことができるのに。"

Kung ibon lang sana ako, nakalipad ako sa iyo.
(もし 鳥 ただ 私は 飛べた 私は へ あなた)
"もし、私が鳥だったならば、あなたの所に飛んで行くことができたのに。"

Gumaling ka sana agad kung ininom mo ang gamot na ito.
(良くなった おまえ すぐに もし 飲んだ おまえ 薬 L この)
"もし、この薬を飲んでいたら、すぐに良ぐなったのに。"

Kung naging propesor lang sana ako,
(もし なった 教授 ただ 私は
pinag-aralan ko sana ang problema.
勉強した 私 は 問題)
"もし、教授だったらば、私は、その問題を研究できたのに。"

また、未来形の仮定法は

Kung　aalis　　ako　bukas,
（もし 出発するだろう　私は　明日
　　binabalot　　ko sana ang aking kagamitan ngayon.
　　詰めるだろう 私　　は　私の　物　　今日）
"もし、明日出発するならば、今日私は、自分の物を詰めていたのに。"

このように仮定的な表現は、従属節は、完了（過去の仮定）、未完了（現在の仮定）、未来（未来の仮定）を使い、主節の方は、未完了、または、完了形を使う。

［注］

1)　最初は、Pilipinoと呼ばれていたが、憲法の規定の変更でFilipinoになった。しかし、タガログ語には"f"という音韻はない。

2)　もともとは、インドネシアのテルナーテ島でポルトガル支配のときに出来上がったピジン（混成語）を使う人たちがフィリピンのマニラ近辺に移住したことで出来上がった言語である。詳しくは,Whinnom(1956)）を参照。

3)　タガログ語は、かつてはインド系の文字を使っていたが、現在ではヨーロッパ系のアルファベットを使っている。ただ、違うのは　a，b，kというc．の位置にkが来るのと、ng[ŋ]をひとつの文字として考え、l，m，n，のあとにng[ŋ]を置く。

a, b, k, d, e, f, g, h, i, j, l, m, n,
ng, o, p, q, r, s, t, u, v, w, x, y, z

4)　正書法としては、属格・目的格の[naŋ]は、省略形のngを使う。

5)　正書法では、[gi]と[gʔi]を区別するために後者の場合に"-"を"g"と"i"の間に挿入する。

6)　動詞の接辞としては、所格（Locative）フォーカスと同じであるが、非フォーカス化の前置詞としては "tungkol sa" を使うので別のフォーカスをたてた。

7)　この単語の語根は"kalakal"で、mang-の影響で前鼻音化してmangalakalになった。

8)　l, y, r, (w)などで始まる単語の場合には、接中辞の-in-でも接頭辞のni-を使っても良い。接頭辞のin-は、母音始まりの場合だけ使う。

niluto　～　linuto

9)　8)と同様に前鼻音化をおこしたもの。語根は、bangka。

10)　8)と同様に前鼻音化をおこしたもの。語根は、pasyal。

11)　Lは、Linkerを示す。

12)　森口(1985)を参照。

13) 小詞として取り扱われるものは、

I.　代名詞（一音節）：　ko（一人称単数），mo（二人称単数，ka（二人称単数）

II.　副詞（一音節）　：　nga（まさしく），pa（まだ），na（もう），
man（もまた），lang（ただ、たった），daw（らしい）
・・・・・・

III. 副詞（二音節）　：　muna（まず），naman（あらためて），kasi（だから），
pala（そこで），・・・・・

IV.　代名詞（二音節）：　ako（一人称単数），tayo（一人称複数），
siya（三人称単数），・・・・・

これらの小詞は、文の意味の結合と関係無く、必ず文頭の単語の次に置かれ、そして、その中にも次のような順番の規則がある。

単語　－　I　－　II　－　III　－　IV　－　Linker

たとえば、

Maganda siyang　　babae.
（美しい 彼（女）+L 女）
"彼（女）は、美しい女性である。）

のように意味的にはmagand + babaeであるが、この小詞の規則により前に出て
美しい　女
来る。

［文献］

Bloomfield, L. 1917 *Tagalog Texts with Grammatical Analysis.* University of Illinois Studis in Language and Literature. Vol.III

Comrie, B . 1976 *Aspect.* Cambridge Textbooks in Linguistics. Cambridge University Press.

_____ 1985 *Tense.* Cambridge Textbooks in Linguistics. Cambridge University Press.

Fleischman, S. 1982 "Discourse Functions of Tense-Aspect Opposition in Narrative." Linguistics Vol. 23.

Guilliaume, G 1929 *Temps et verbe.* Collection linguistique publiée par la société de linguistique de Paris.

Laktaw, P.S. 1929 Estudios grammaticales sobre la lengua Tagalog. Juan Fajardo. Manila.

Lopez, C. 1941 *A Manual of the Philippine National Language.* Bureau of Printing. Manila.

森口恒一 1980 「ヤミ語」 『黒潮の民族・文化・言語』 pp. 308-386. 角川書店.

_____ 1985 『ピリピノ語（タガログ語）文法』大学書林. 東京

Ramos, T.V. 1974 *The Case System of Tagalog Verbs.* Pacific Linguistics Series B. - No. 27.

Schachter, P & F. Otanes 1966 *Tagalog Reference Grammar.* University of California Press, L.A. & Berkeley.

Whinnom, K. 1956 *Spanish Contact Vernaculars in the Philippine Islands.* Hong Kong.

Wolff, J.H. 1972 *A Dictionary of Cebuano Visayan.* Philippine Journal of Linguistics Special Monograph Issue No. 4.

朝鮮語における過去の出来事を表す表現

生越直樹

＜目次＞

1．本稿の目的
2．朝鮮語のテンポラリティーの表現手段
　2．1　用言の形態
　2．2　時間副詞・時間名詞
3．過去の出来事を表す表現
　3．1　考察の対象
　3．2　었'əss形
　　3．2．1　었'əss形の二つの用法
　　3．2．2　現在と切り離されたもの
　　3．2．3　現在と結びついているもの
　　3．2．4　問題となる用法
4．었었'əss'əss形
5．더də形
6．었더'əssdə形
7．非過去形
おわりに

1．本稿の目的

本稿は、朝鮮語において過去の出来事がどのような表現で表されるのか、その表現のリストを提示しようとするものである。ここで言う過去とは、テンポラリティーの過去をさす。テンポラリティーとは、工藤(1992a)に従えば、「文によってある出来事を伝えようとする場合、その出来事の成立時間をなんらかのかた

ちで表す必要が生じうるが、この文レベルの<出来事の時間的位置づけ(time reference)>に関わる機能・意味的カテゴリー」である。[1] テンポラリティーは、文法的（形態論的）カテゴリーとしてのテンスとは区別される。これまで朝鮮語のテンス、あるいはテンスに関わると思われる諸形態の研究は、数多くなされている。しかしながら、テンポラリティーという概念のもとで朝鮮語の表現を分析した例は、著者の調べた限りでは、これまでのところなさそうである。テンポラリティーという全ての言語に通じる概念をもとにすることにより、その分析結果は、朝鮮語自体の時間表現を考える材料となるだけでなく、他の言語との比較対照、あるいは言語における時間表現のあり方を考える材料にもなるであろう。

2．朝鮮語のテンポラリティーの表現手段

朝鮮語のテンポラリティーの表現手段は、基本的には日本語と同じである。つまり、テンポラリティーは基本的に用言の形態的対立によって表され、補助的なものとして時間副詞・時間名詞が用いられる。用言の形態は、文法的（形態論的）で義務的な問題であり、時間副詞・時間名詞は語彙的で任意的な問題である。この用言の形態的対立を文法的カテゴリーとしてのテンスと認めるか否かは、研究者によって意見が分かれている。これまで様々な研究がなされてきているが、現在のところ、朝鮮語のテンスについて定説とされるものはない。これまでの研究の大まかな流れについては、伊藤(1989)、高永根(1990)などに述べられており、ここでは詳しくは述べない。

では、朝鮮語にテンポラリティーの表現手段としてどのようなものがあるか、簡単に述べておくことにする。

2．1　用言の形態

朝鮮語のテンポラリティーの表現手段のうち、まず用言の形態について見ていく。朝鮮語の場合、文末と連体修飾節では用言のとる形態が異なる。本稿では、考察の対象を基本的な構造を持つ文に限定したため、連体修飾節での用言の形態は扱っていない。したがって、ここでの説明も文末の形態のみについて行い、連体修飾節での形態については省略する。[2] 用言の文末の形態のうち、テンポラリティーに関係する形態としては、次のようなものがある。なお、例文の末尾に

出典がないものは作例である。

①用言（動詞、形容詞、存在詞、指定詞）の語幹＋接尾辞なし（φ）[3]

----- ここではこの形態を「非過去形」と呼ぶ（以下同じ）

＜現在、未来、意思などを表す＞

(1)그는　매일　아침　빵을　먹는다.

gɯ-nɯn mai'ir 'acim paŋ-'ɯr məg-nɯnda [4]

彼は　毎日　朝　パンを　食べる

②用言の語幹＋｛었'əss｝　----- 「었'əss形」

＜過去、あるいは完了を表す＞

(2)그는　어제　빵을　먹었다.

gɯ-nɯn 'əjəi paŋ-'ɯr məg-'əss-da

彼は　昨日　パンを　食べた

③用言の語幹＋｛었었'əss'əss｝　----- 「었었'əss'əss形」

＜現在結果が残っていない過去を表す＞

(3)작년에는　이곳에　진달래가　피었었다.

jagnyən-'əi-nɯn ikos-'əi jindarrai-ga pi-'əss'əss-da

去年には　ここに　ツツジが　咲いていた

（今は咲いていない）

菅野(1986)は、①の「非過去形」、②の「었'əss形」、③「었었'əss'əss形」（菅野(1986)はそれぞれを「非過去形」「過去1形」「過去2形」と呼んでいる）をテンス形式と認めている。②の形については、時制（テンス）のほか、相（アスペクト）、あるいは時相（時制と相の混合概念）という概念で捉えようとする立場もある。③の形については、多くの場合②の形と交替可能であることから二次的な形態と見る立場もある。

④用言の語幹＋｛더də｝　----- 「더də形」

＜直接経験したことの回想を表す＞

(4)어제　부산에는　　눈이　오더라.

'əjəi busan-'əi-nɯn nun-'i 'o-də-ra

昨日　釜山では　　雪が　降ったよ

④の形については、これまで多くの研究がなされてきたが、いまだにはっきりした位置付けがなされていない。

⑤用言の語幹＋｛겠gəiss｝　　-----「겠gəiss形」

＜ある事が起こる蓋然性、意志を表す＞（未来を表すとする研究者もいる）

(5)내일도　비가　오겠다.

nai'ir-do bi-ga 'o-gəiss-da

明日も　雨が　降るだろう

⑤の形を未来テンスとみなす研究者もいるが、多くの研究者は⑤の形をムード形式と見ており、朝鮮語には未来テンスはないと考えている。テンポラリティーに関係する形態としては、①～⑤の形のほかに、②と④が一緒になった「～-었더'əssdə-」という形態もある。

すでに述べたように、朝鮮語に文法的カテゴリーとしてのテンスが存在するのか、存在するとすればそれにかかわる形態と体系はどのようなものであるのか、といった問題については、今のところ研究者によっていろいろな立場がある。上に挙げた形態のうちどれをテンス形式として認めるかもはっきりしない。伊藤(1989)がすでに指摘しているが、そもそも、これまでの研究の多くは、用言の形態の対立が何を意味するかという観点よりも、用言の諸形態から時制や相を表す形態素を抽出し、その形態素の意味（意義素）を分析するという方法をとってきた。つまり、「現在形」「었'əss形」という捉え方ではなく、形態素｛φ｝（または｛ㄴnɯ｝）、｛었'əss｝、｛었었'əss'əss｝などを抽出し、その形態素が時制を表すのか、あるいは相、叙法を表すのか、あるいは時制と相を合わせ持つのかといった観点から論じられてきたのである。また、文末形だけでなく接続形、連体形も含め、その形態素が含まれる形態すべてについて論じようとしており、そのことが却って問題を複雑にしている。

2．2　時間副詞・時間名詞

すでに述べたように、朝鮮語では、時間副詞・時間名詞はテンポラリティーの表現手段として任意的なものでしかない。この点は日本語の場合と同じであり、時間副詞・時間名詞の用いられ方も日本語と極めて似ている。たとえば、前節で挙げた例文(1)～(5)の매일mai'ir（毎日）、아침'acim（朝）、어제'əjəi（昨日）、작년jagnyən（去年）、내일nai'ir（明日）は時間名詞である。時間副詞としては、아까'agga（さっき）、아직'ajig（まだ）などがある。朝鮮語の時間副詞・時間名詞の全体的な研究はほとんどなく、今後の課題である。

以上見てきたように、朝鮮語においてテンポラリティーを決定するのは、主として用言の形態であり、本稿では、用言の形態を中心にして述べて行くことにする。

3．過去の出来事を表す表現

3．1　考察の対象

過去の出来事を表す表現と言っても、実際には様々な要素が絡んでくる。今回は考察の対象をできるだけ基本的な構造を持つ文に限定して行おうとした。そのため、考察の対象としたのは、次のような条件の文である。

- 会話文（小説に出てくる会話文、ドラマの脚本）に限った。小説の地の文や随筆の文は話者の時間的な軸の置き方が複雑になるので除外した。
- 発話時を時間の基準軸とする文ということで、対象を文末の形式に限り、接続や連体の形式は除外した
- 推量、伝聞などモダリティーに関わる要素が付いた文は出来るだけ除いた。ただし、더形を扱う関係で詠嘆形は対象に含めた。

以上の条件で資料を収集した結果、考察の対象となる用言の形態としては次のようなものがあった。

1 ―　었'əss形

2 ―　었었'əss'əss形

3 ―　더də形

4 ―　었더'əssdə形（用言の語幹＋었더'əssdə）

5 ―　非過去形

上の形態のうち非過去形と었'əss形の用法については、すでに伊藤(1989)、伊藤(1990)による詳しい分析がある。伊藤(1989)、伊藤(1990)は、本稿と似た条件で収集した資料をもとに、非過去形と었'əss形の用法を詳しく分析し、かつ個々の用法について豊富な用例を付けている。特に었'əss形の場合、その主たる用法が過去を表すものであるところから、本稿の目指すところと重なる部分が多く、本稿ではその分析結果、用例をかなり参考にした。

3．2　었'əss形

3．2．1　었'əss形の二つの用法

まず、過去の出来事が었'əss形によって表現される場合から見ていく。今回集めた用例を見ると、過去の出来事を表す었'əss形の用例は、大きく分けて次の二つに分けられる。なお、形態素｛었'əss｝は、前に来る用言によって-았'ass-、-었'əss-、-였'yəss-という異形態がある。したがって、었'əss形の実際の形は用言の語幹＋-았'ass-、または-었'əss-、-였'yəss-となる。用言の種類によって語幹と｛었｝が縮約されることがあるので、例文では縮約形の後ろに[ ]して縮約される前の形を示すようにした。

Ⅰ．その過去の出来事が現在と切り離された形で把握されているもの

(6)어제　다나카씨　왔[오았]어?　　아니, 안　왔[오았]어.

'əjəi danaka-ssi 'wass['o-'ass]-'ə　'ani, 'an 'wass['o-'ass]-'ə

昨日　田中さん　来た?　　いや、来なかった。

Ⅱ．その過去の出来事が現在と結びついた形で把握されているもの

(7)다나카씨　벌써　왔[오았]어?　　아니, 아직　안　왔[오았]어.

danaka-ssi bərssə 'wass['o-'ass]-'ə 'ani,'ajig 'an 'wass['o-'ass]-'ə

田中さん　もう　来た?　　いや、まだ　来ていない。

この二つの用法には形態上の差がなく、その違いは文脈等によって判断される。伊藤(1990)は、Ⅰの用法を「相対的に現在に影響を与えていない過去のことがら」を表すもの、Ⅱの用法を「過去の動きや変化の結果が現在に影響を及ぼしている

もの」とし、Ⅰの었'əss形は었었'əss'əss形と交替可能であるのに対し、Ⅱの었'əss形は었었'əss'əss形と交替不可能であることを指摘している。었'əss形と었었'əss'əss形の交替可能性によるテストは、Ⅰ、Ⅱを区別するうえで大変有効だと思われる。しかしながら、伊藤(1990)も述べているように、二つの形が交替可能か否か微妙な場合もあり、ⅠとⅡの用法ははっきり区別できるものではない。従来の研究では、Ⅰの用法を過去、Ⅱの用法を完了とみなすことが多く、このような用法の違いがあることが、形態素｛었'əss｝に対する研究者の立場の違いをうみだす原因となっている。[5]

3．2．2　現在と切り離されたもの

では、었'əss形のⅠ、Ⅱの用法について、用例を挙げながらもう少し詳しく述べていくことにする。まず、Ⅰの「過去の出来事が現在と切り離された形で把握されている」場合の例を挙げる。用例の日本語訳はできるだけ直訳するようにした。日本語として不自然なときは括弧してより自然な日本語を付け加えた。

(8)네,　졸업　연주회　땐　<나비 부인>중에서　<어떤　개인
nəi,　jor'əb 'yənjuhoi ddai-n <nabi bu'in>juŋ-'əisə <'əddən gai'i-n
ええ、卒業 演奏会の 時は　<蝶々夫人>の中から　<ある　晴れた
날>을　불렀어요」〔霧〕
nar>'ɯr　burr-əss-'ə'yo
日に>を 歌いました。

(9)오늘　네　담임선생님　만나　두 시간이나
'onɯr nəi　dam'im-sənsaiŋnim　manna　du sigan-'ina
今日　おまえの 担任の先生に　会って 二 時間ほど
얘기했[하였]다.　〔우〕
'yaigihaiss[ha-'yəss]-da
話をした。

(10)그렇지만　저는　한 달　동안　밤일을　하는
gɯrəh-jiman jə-nɯn han dar doŋ'an bam'ir-'ɯr ha-nɯn
けれども　私は　一か月の 間　夜勤を　する

조합원들이　　울면서　　틀　　사이를　뛰는　　것을

johab'wən-dɯr-'i 'ur-myənsə tɯr　sa'i-rɯr ddui-nɯn gəs-'ɯr

組合員たちが　泣きながら 機械の 間を　走る　のを

너무　　자주　　보았읍니다. 〔잘〕

nəmu　　jaju　　bo-'ass-'ɯbnida

あまりに しばしば 見ました

(11)작년　겨울에　　어디　있었소? 〔森〕」

jagnyən gyə'ur-'əi 'ədi　'iss-'əss-so

去年の　冬に　　どこに いました?

(12)봤지?　오늘····60명 중　네편은　　단 하나도 없었어. 〔우〕

bwass-ji? 'onɯr···60myəŋ juŋ nəi-pyən-'ɯn dan hana-do 'əbs-'əss-'ə

見ただろ　今日····60名 中　お前の側は　ただ一人も　いなかった。

(13)「어머나···· 친한　친구분이셨나　부죠?」

ほおー　親しい友だちでいらっしゃったようですね

「셋이　아주　친했[친하였]어. 」〔천〕

səis-'i 'aju　cinhaiss[cinha-'yəss]-'ə

三人が　とても 親しかったんだ

(14)사용자2 :「임금은　지난　2월에　이미　인상　조정이　되었고, 그

使用者2 :「賃金は　この　2月に すでに 引き上げ調整がなされ、その

조정에　따라　　지급하고　있어요. (中略)」

調整にしたがって 支給して　います。」

근로자1 :「일방적인　　인상이었읍니다. ～ 」〔잘〕

gɯnroja1:　'irbaŋjəg-'i-n　'insaŋ-'i-'əss-'ɯbnida

勤労者1 :「一方的な　　引き上げでした。」

(8)～(10)は動詞の었'əss形、(11)(12)は存在詞、(13)は形容詞、(14)は指定詞の例である。この種の例では、出来事が起こった時が、文中の語句によって明示されていたり((8)(9))、文脈によって知ることができる((14))。また、文脈によって変化の結果状態が現在まで残っていないことが明らかである。

3．2．3　現在と結びついているもの

次に었'əss形の用法のうち、Ⅱの「過去の出来事が現在と結びついた形で把握されている」例を挙げてみる。

(15)벌써　윤병조에게　　돌려　줬[주었]읍니다.〔우〕

bərssə 'yunbyəŋjo-'əigəi dorryə jwəss[ju-'əss]-'ɯbnida

もう　ユン・ピョンジョに 返して やりました。

(16)저희는　천　오백　명의　근로자를　대표해서

jəhwi-nɯn cən 'obaig myəŋ-'ɯi gɯnroja-rɯr daipyohaisə

私達は　千　五百　名の　勤労者を　代表して

이　자리에　나왔[나오았]읍니다.〔잘〕

'i jari-'əi na'wa[nao-'ass]-'ɯnida

この 場に　出てきました。

(17)(수화기　들고　와서)

(受話器を持ってきて)

할머니,　반가운　전화가　왔[오았]는데요.〔천〕

harməni, banga'un jənhwa-ga 'wass['o-'ass]-nɯndəi-'yo

おばあさん、うれしい 電話が　かかって来ましたよ。

(18)「아가씨, 어머니는　없어요?」「돌아가셨[돌아가시었]죠.」〔人〕

'agassi, 'əməni-nɯn 'əbs-'ə'yo dor'agasyəss[dor'aga-si-'əss]-jyo

「娘さん、お母さんは いないんですか。」「死んだわ。」

(19)네가　서울에서　오고　공부도　잘한다기에　기대했는데

nəi-ga sə'ur-'əisə 'ogo goŋbu-do jarha-nda-gi'əi gidaihaiss-nɯndəi

お前が ソウルから　来て 勉強も　よくできるので　期待していたが

솔직이　실망했[하였]다.〔우〕

sorjig'i simaŋhaiss[ha-'yəss]-da

正直　失望した。

これらの例はいずれも過去に起こった出来事を表しているが、文脈、言い換え

ればその発話の状況から見て、その出来事の結果状態が現在も続いている。話者の発話意図も、程度の差はあるが、出来事そのものよりも現在の状況を示すところにある。その辺りが、Ⅰの用法と異なる点であろう。

Ⅱの用例はいずれも動詞の었'əss形であり、形容詞、存在詞、指定詞の었'əss形には、基本的にこの種の用法はないようである。ただし、一部の形容詞の場合はⅡの用法と似た例があり、この点については次の３．２．４で扱う。

ここでは、었'əss形の用法をⅠ、Ⅱに分けたが、実際の用例ではどちらとも判断がつかない例が多くある。었었'əss'əss形と入れ換えできない었'əss形の文でも、現在との結び付きがあまり感じられないものもある。現在との結び付きの有無は、文によって明確に区別できるものではなく、連続的なものと考えられる。

３．２．４　問題となる用法

었'əss形の用例の中には、過去の出来事を表すものなのか、判断に迷うものがある。それら問題となる用例は、いくつかのタイプに分けることができる。ここでは、その問題となる用例について考えてみたい。

①現在の出来事とも考えられるもの

まず、過去の出来事を表すのか、現在の出来事を表すのか、扱いが微妙なものを取り上げる。例としては、次のようなものがある。

(20)온몸이　　얼었어요.

'on-mom-'i　'ər-'əss-'ə'yo

身体全体が　凍えました。

밥은　고사하고, 뜨뜻한　아래목에서　발이나　녹이구　갔으면. 〔森〕

御飯はさておき、暖かい　ところで　足でも　温めて　行ければ。

(21)해가　　많이　　길어졌[길어지었]구나····

hai-ga　manh'i　gir'əjyəss[gir'əji-'əss]-guna····

日が　　とても　長くなったなあ····

니가　퇴근해　오면　캄캄했는데····　〔천〕

お前が 退勤してくると 真っ暗だったのに

(22)「외할아버지께　인사　드려야지.」「안녕하세요？」

「おじいさんに　挨拶しなさい。」　「こんにちは。」

「오냐,　어이구　그새　　많이들　　컸구나.」〔이〕

'onya, 'ə'igu　gɯsai　　manh'i-dɯr　k-əss-guna

「よし、おお　その間に　とても　　大きくなったなあ。」

これらの例は、明らかに現在の話者自身の状態あるいは話者の目の前で起こっている状況についての発話である。これまで見てきた３．２．３の例は、話者の目の前で起こっていることを表現したものではなかった。とすると、これらの例は現在の出来事の表現だと言うことになる。しかし、上の例の場合、いずれも、話者が以前の状況、たとえば「凍っていない」「長くなってない」状況を知っていて、その過去における状況と現在の状況を比べて述べている。つまり、これらの例も発話時以前を意識した表現なのである。その点から考えると、これらの例も過去の表現と言ってよいかもしれない。

(23)여직원：어머, 미스서, 미스서.

女子職員：まあ、ソさん、ソさん。

（남직원 살그머니 손을 뻗고 몇 번 흔들어 보더니 질겁. 물러난다.）

（男子職員そっと手を伸ばし何度か揺すってみたところびっくり。退く。）

남직원１：　죽었어.〔코〕

namjig'wən1:jug-'əss-'ə

男子職員１：死んだ（死んでる）

(24)「이제　가야지！」「네.　（본다.）」

「もう　行こう。」「はい。（見る。）」

「아니　뭘　　봐,　　뭐　묻었어？」〔엄〕

'ani　mwə-r bwa,　　mwə　mud-'əss-'ə

「あれ　何を　見る（見てる）、何か　付いたか（付いてるか）。」

(25)（매우　즐거운　듯　콧노래　부르며　면도하다가）

（とても楽しそうに　鼻歌を歌いながら　ひげ剃りをしていたが）

어때　여보,　수염　깨끗이　　밀어졌[밀어지였]어？」〔모〕

'əddai 'yəbo, su'yəm ggaiggɯs'i mir'əjyəss[mir'əji-'əss]-'ə

どうだ おい、 ひげ　きれいに　剃れた（剃れてる）？

(26)반장：～　그런데　그　친구　어디　살았어？

banjaŋ:～ gɯrəndəi gɯ cingu 'ədi sar-'ass-'ə

班長：　ところで そいつ　どこに 住んだ（住んでる）？

남형사：　회사　사원　아파트에서　혼자　살고　있는데요.」〔코〕

男の刑事：会社の社員アパートで　独りで 住んでいるんですが。

(27)아저씨네는　뭘　갖구　다녀요？　　망치나　톱이겠지 머.

おじさんたちは何を持って歩いてんです。かなづちかノコギリでしょ。

요　속에는　　헌　속치마　몇벌,　　빤스,　　화장품,

'yo sog-'əi-nɯn hə-n sogcima myəc-bər, bbansɯ, hwajaŋpum,

この 中には　古い シミーズ 数枚、　パンティ、化粧品、

그런　게　들었지요.　〔森〕

gɯrə-n gəi dɯr-'əss-ji-'yo

そんな 物が 入ったんですよ（入ってるんですよ）。

上の例も、現在の状況について述べたものである。話者が以前の状況を知っている点は、(20)～(22)の例と同じであり、やはり発話時以前を意識した表現と言えよう。ただし、上の例は(20)～(22)と異なる点もある。(20)～(22)の場合は、いつ変化が起こったか特定できないような出来事を表している。たとえば、(20)(21)での「体が凍る」「日が長くなる」という変化は徐々に起こったものであり、ある特定の時間に起こったものではない。一方、(23)～(27)の場合は、動作・変化がいつ起こったか特定でき得るような出来事を表している。この違いが単に動詞の種類によるのか、他の要素が絡むのか、さらに用例を集める必要がある。この(20)～(22)と(23)～(27)の違いは、日本語と対照したときに興味深い。(23)～(27)の場合、対応する日本語はテイル形を使うことが多い。このような日本語と朝鮮語の違いが何を意味するのか、この問題については、別の機会に改めて論じたいと思っている。

(28)사모님　예쁘게　생기셨[생기시었]어요？

samonim　'yəibbɯ-gəi　saiŋgi-syəss[saiŋgi-si-'əss]-'ə'yo

奥さま　きれいに　生じましたか（おきれいですか）。

(29)「단 거 너무 좋아하면 이 썩구 살찝니다.」「누구나 그렇게 되지 않아요.

「甘いものをあまり好むと虫歯になり太ります。」「誰でもそうはなりません。

（中略）제　몸메는　어때요,　살쪘[살찌었]어요？」〔모〕

jəi　momməi-nɯn　'əddai-yo,　sarjjyəss[sarjji-'əss]-'ə'yo

私の 体つきは　どうです、太りましたか（太ってますか）。

(30)너　귀먹었어？

nə　gui-məg-'əss-'ə

おまえ 耳が遠くなったのか（耳が遠いのか）？

급장이 목메지 않도록　물　한　컵　갖다주란 말이야.〔우〕

級長が 喉が乾かないよう水をコップ一杯持って行けというんだ。

これらの例も、(20)～(27)と同じく話者が現在の状況について述べたものである。しかし、これまでの例と異なり、これらの例は話者が現在の状況と過去の状況を比較して述べたものではない。たとえば、(28)(29)の場合、相手は以前の状態を知らない。(30)の場合は微妙だが、以前の状態を知らなくても었'əss形を使えるようである。とすると、この種の었'əss形の例は、過去の出来事ではなく現在の状態を表す表現ということになる。菅野(1986)、伊藤(1990)では、었'əss形のこの種の例を「現在の状態」を表すものとしている。(28)～(30)のような例に出てくる動詞は、形容詞に近い意味を持つものが多い。中には、생기saiŋgi-（生ずる、～に生まれつく）などのように、動作の継続、あるいは変化の結果継続を表す-고 있go 'iss-（～ている）、-어 있'ə 'iss-（～ている）の形をとらないものもあり、これらの場合は形態的にも形容詞に近い。ただし、ここに出てくる動詞の었'əss形が常に現在の状態を示すわけではない。たとえば、次のような使い方も可能である。

(31)작년보다　살쪘[살찌었]지요.〔作例〕

jagnyən-boda　sarjjyəss[sarjji-'əss]-ji-'yo

去年より　太ったでしょ。

(31)の었'əss形は、(29)の場合と異なり、(20)～(27)の場合と同じ使い方がされている。(28)～(30)のような使い方をされる動詞の었'əss形は、文脈によっていろいろな意味になり得るのである。このほか、(32)の멀mər-（遠い）など、形容詞の中にも(28)～(30)のような用法を持つものがある。これらの位置づけをどうするか、今後の検討課題である。

(32)아직　멀었어요.　〔作例〕

'ajig mər-'əss-'ə'yo

まだ　遠かったです（まだまだ遠いです、まだまだです）。

②量的なことがらを表す場合

(33)드나들기,　시작한　지 한　일주일　가량　됐[되었]나요.〔꿈〕

dɯnadɯr-gi sijagha-n ji han 'irju'ir garyaŋ dwaiss[doi-'əss]-na-'yo

出入りしはじめて　約一週間　くらいに　なった（なる）かしら。

(34)「어머, 결혼을 언제하셨는데　아직 아이들이 없어요？」

「まあ、結婚を いつされたんです、まだお子さんがいないんですか。」

「이제　삼년　좀　넘었읍니다」〔霧〕

'ijəi samnyən jom nəm-'əss-'ɯbnida

「もう　三年　ちょっと　越えました（になりました、なります）。」

(35)「앞으로 십 킬로　남았군요」「예, 한 삼십 분후엔 도착할 겁니다」〔霧〕

'ap-'ɯro sib kirro nam-'ass-gun-'yo

「あと　十 キロ 残りましたね。」「はい、約三十分後には着くでしょう。」

（ですね）

これらの例では、期間や距離など量的なことがらが問題になっており、ある動作・変化の実現そのものを問題にしているわけではない。このような場合、例によっては、結果状態の継続を表す動詞＋-어　있'ə'iss-（～ている）の形や非過去形と入れ替え可能なようである。発話時以前のことが意識されているという点では、(20)～(27)と同じものと見てもよいのかもしれない。今回は暫定的に他の用例と区別しておくが、分析が進めば他のものと一緒に扱うことになるかもし

れない。なお、日本語でも、この部分はいろいろな形で表現可能であり、対照研究の観点からも興味を引くところである。

③思い出し

(36)「장사꾼이 있잖아요？」「그렇지, 강서기가 있었군 그래.」〔客〕

gɯrəh-ji, gaŋ-səgi-ga 'iss-'əss-gun gɯrai

「商売人がいるじゃないですか」「そうか、カン書記が いたなあ。」

この場合も、過去の出来事とは言いにくい。었'əss形の用法の中でも、モダリティーと関連する部分と考えられる。

4．었었'əss'əss形

今回見た資料では、었었'əss'əss形の用例はあまり多くなかった。었었'əss'əss形は会話文より地の文や論説文で多く使われている可能性がある。以下、今回出てきた用例をいくつか挙げてみる。なお、形態素｛었었'əss'əss｝の場合は、-았었'ass'əss-、-었었'əss'əss-、-였었'yəss'əss-という異形態があるので、었었'əss'əss形の実際の形は用言の語幹＋-았었'ass'əss-、または-었었'əss'əss-、-였었'yəss'əss-となる。

(37)옛날에 우리 절교도 한 번 했었[하였었]지.〔천〕

'yəinar-'əi 'uri jərgyo-do han bən haiss'əss[ha-'yəss'əss]-ji

昔 私達 絶交も 一度 したね。

(38)걔들 어렸을 땐 산타할아버지가 진짜

gyai-dɯr 'əryəss-'ɯr ddai-n santahar'abəji-ga jinjja

あの子達 小さい ときは サンタクロースが 本当に

있는 걸로 믿었었는데.〔엄〕

'iss-nɯn gər-ro mid-'əss-'əss-nɯndəi

いる ものと 信じていたのに

(39)자,　아이스크림　먹구　서점에　가구　또　어디

ja,　'a'iswkwrim　məg-gu　səjəm-'əi　ga-gu　ddo　'ədi

さあ、アイスクリームを　食べて　本屋に　行って　ほかに　どこに

갔었[가았었]어? 〔천〕

gass'əss[ga-'ass-'əss]-'ə

行った。

(40)「작년　겨울에　어디　있었소?」(中略)「좋았지　정말. 대전　있었읍니다.

「去年の冬　どこにいました。」「よかったね、本当に。大田にいました。

옥자라는　애를　만났었[만나았었]죠. 〔森〕

'ogja-ranwn　'ai-rwr　mannass'əss[manna-'ass-'əss]-jyo

オクチャという　娘と　出会いましてね。

었었'əss'əss形は、対話の冒頭で使われることはないようである。었었'əss'əss形が使われるのは、子供時代など現在から時間的に隔たったときのこと((37)(38))、現在は結果状態が残っていないこと((39))、前に話していた出来事の時点より以前に起こったこと((40))などの場合である。었었'əss'əss形は多くの場合었'əss形と交替可能であり、上のような条件の場合でも、その使用は任意である。したがって、었었'əss'əss形は、表す出来事の時点と現在との心理的な面での時間的隔たりを強調したいときに使われるものと思われる。

5. 더də形

次に、過去の出来事が더də形によって表される場合について検討する。ところで、本稿では用言の語幹＋{더də}を더də形と呼んでいる。今回扱う形態の中には、形態素{더də}とそれに続く語尾がはっきり分離できないものがあり、注意が必要である。たとえば、-ㅂ디다bdida(-습디다swbdida)(叙述)、-ㅂ디까bdigga(-습디까swbdigga)(疑問)という形は、待遇法の上称と{더də}の意味を合わせ持った形とされる。では、더də形の用例をいくつか挙げてみる。

(41)전　정말　그런　골목이　있는지　없는지도　몰랐다니깐요.

私は本当にそんな路地があるのかないのかも知らなかったんですから。

언덕길을 한참 올라갔을 때 아래쪽에서 총소리가
'əndəggir-'ɯr hancam 'orragass-'ɯr ddai 'araijjog-'əisə coŋsori-ga
坂道を しばらく登った 時、 下の方から 銃声が
들렸고, 막 달려 내려가는데 그 골목에서 어떤
dɯrryəss-go, mag darryə nairyəga-nɯndəi gɯ gormog-'əisə 'əddən
聞こえて、 急いで 駆け降りて行ったところ その路地から ある
청년이 권총을 들고 뛰어나오더군요. 〔壓〕
cəŋnyən-'i 'gwəncoŋ-'ɯr dɯr-go ddui'əna-də-gun-'yo
青年が 拳銃を 持って 走り出て来たんですよ。

(42)애가 얼마나 외롭구 의지가지할 데가 없었으믄
'ai-ga 'ərmana 'oirob-gu 'ɯijigajiha-r dəi-ga 'əbs-'əss-'ɯmɯn
あの子が どれほど 寂しくて 身を寄せる ところが なかったのか
우리집에 왔다가 마지막인 듯이 날 보구 가더라. 〔옹〕
'urijib-'əi 'wass-daga majimag-'in dɯs'i na-r bo-gu ga-də-ra
うちに 来て 最後の ように 私に 会って帰って行った。

(43)고향에 갔다가 엄석대 개 때문에 기분 콱 잡쳤어.
田舎に帰ったが、オム・ソクテ、奴のために気分がものすごく悪かった。
고향 친구들 불러 술 한잔 하는데 온통 개
gohyaŋ cingu-dɯr burrə sur hanjan ha-nɯndəi 'ontoŋ gyai
田舎の 友達達を 呼んで 一杯飲んだんだが、 ずっと 奴の
얘기뿐이더군. 〔우〕
'yaigi-bbun-'i-də-gun
話ばかりだったよ。

(44)어디선가는 우유 남는다구 우유를 안받는
'ədisə-nga-nɯn 'u'yu nam-nɯnda-gu 'u'yu-rɯr 'an-bad-nɯn
どこだかは 牛乳が 残るといって 牛乳を 受け取らない
모양이던데? 니넨 괜찮니? 〔담〕
mo'yaŋ-'i-də-ndəi
様子だったが。 お前のところは大丈夫か。

上の文は、いずれも過去の出来事、それも過去に話者が直接見聞きした事柄について述べたものである。더də形については、これまで数多くの論著があり、その捉え方も様々である。そのなかで、話者が過去に直接体験（知覚）した事柄について더də形が用いられるという点は、各研究者とも一致している。더də形の意味・用法を表すのに、回想あるいは目撃という用語が使われるのは、この特徴によるものである。[6]

さて、上の例で注目したいのは、これら더də形の文が、話者の直接体験を淡々と述べたものではないという点である。더də形は、自分が実際見聞きしたことだ、ということを強調したいときに使われているのである。たとえば、(41)の文は自分が犯人ではないことを必死になって訴える場面での文であり、「自分は確かに見たんだ、嘘じゃない」という話者の気持ちが含まれている。つまり、더də形は話者の直接体験した出来事を表すとともに、その出来事に対する話者のなんらかの感情をあわせて示す文だと考えられる。(42)～(44)では、文中や文の前後にその出来事に対する話者の感情・評価を表す言葉がある。このほか、더də形の文では、次のように、述部に話者の感情・評価を表す語そのものが来ることも多い。

(45)보니까　눈치가　이상하더군요.　　무슨 일이 있었나요？〔客〕

bo-nigga nunci-ga 'isaŋha-də-gun-'yo

見ると　雰囲気が　おかしかったですね。何か　あったんですか

(46)야,　세상　우습더라.

'ya,　səisaŋ 'uswb-də-ra

おい、世の中　おかしかったぞ（おかしなもんだぜ）。

내가 고시에 패스하자마자　중매장이가　　막　들어 오는데.... ～〔霧〕

俺が高試にパスしたとたん結婚の世話をやく人がやたらやって来るんだが～

(47)취졸　해　보니　녀석　계산　하난　상당히　빠르던데요？〔壓〕

cuijor hai bo-ni　nyəsəg gyəisan hana-n saŋdaŋhi bbarɯ-də-ndəi-'yo

取調べをしてみると、奴め 計算だけは　相当に　早かったですよ

(48)야　　그 사람　환장한　　모양이더군.〔客〕

'ya　　gɯ saram hwanjaŋha-n mo'yaŋ-'i-də-gun

いやあ、あいつ、気が違った　みたいだったなあ。

(49)그 지난번에 부르던 거 참 좋습디다

gɯ jinanbən-'əi burɯ-dən gə cam joh-sɯbdida

あの この前 歌った の、とっても よかったですよ

上の文はいずれも述部に話者の感情・評価を表す語が使われている。その話者の感情・評価は、話者が過去に直接見聞きした事柄に対して、その体験時に抱いたものである。そして、これらの文が出てくるのは、その話者が抱いた感情・評価を生々しく伝えようとする場面である。つまり、上の더də形の文は、話者が過去において抱いた感情・評価を、発話時に自分の心によみがえらせつつ述べる文だと考えられる。これまで見てきた더də形の用例を見ると、話者の直接体験（知覚）、話者の感情・評価という２つの要素が共通して含まれている。ところで、工藤(1992b)は、日本語の会話文におけるいわゆる歴史的現在用法について、次のようなことを指摘している。[7]

「過去の出来事の表現にあたっては、過去形が基本的ではあるが、話し手自らが直接体験した出来事を、感情・評価的に表現する場合には非過去形が使用される。これは、過去の出来事の記憶の生々しさ＝発話時における過去の出来事の心理的現存性を表現するものである。」（６ページ）

会話文における朝鮮語の더də形は、工藤(1992b)が指摘した日本語の歴史的現在用法とよく似た特徴を持っていると言えるだろう。ただし、日本語の歴史的現在用法が体験した出来事そのものに使われるのに対し、더də形の場合は体験した出来事に対する話者の感情・評価にも使われる。더də形は出来事そのものだけでなく、出来事時の感情・評価の心理的現存性も表すと考えられる。さらにもう一つ、더də形は対話の冒頭の文で使われることもあり、この点も日本語の歴史的現在用法と異なる点である。いずれにせよ、朝鮮語の더də形がテンポラリティーとともにモダリティーとも深く結び付いている形式であることは、間違いない。더də形の用法については、会話文のほかに小説の地の文や論説文などの用例についても検討する必要があろう。

６．었더'əssdə形

었더'əssdə形については、今回用例が少なく、はっきりしたことはわからない。

用例としては次のようなものがある。

(50)「목씨 아저씨가 다쳤어요. 」　「사고가 났[나았]던가요？」〔客〕

sago-ga nass[na-'ass]-də-nga-'yo

「モクおじさんがケガしたんです。」「事故が 起こったんですか。」

(51)반장：가족상황은？

班長：家庭状況は。

남형사：（中略）가난하게 자라났습니다.

男刑事：　貧しく　育ちました。

대학까지　근근히　아르바이트로　마쳤[마치었]더군요. 」〔코〕

daihag-ggaji gɯngɯnhi 'arɯba'itɯ-ro　macyəss[maci-'əss]-də-gun-'yo

大学まで　なんとか アルバイトをして 終えたんです。」

(52)「인숙인 왜 내 질문을 피하지요？」

「インスクは どうして私の質問を避けるんです。」

「무슨 질문을　하셨[하시었]던가요？」〔霧〕

musɯn jirmun-'ɯr ha-syəss[ha-si-'əss]-də-nga-'yo

「何の 質問を　なさいましたか。」

(53)「전공이 무엇이었던가요？」　「성악공부 좀 했어요」〔霧〕

jəngoŋ-'i mu'əs-'i-'əss-də-nga-'yo

「専攻は 何だったんですか。」　「声楽の勉強をちょっとしました。」

었더'əssdə形を、었'əss形と더də形の用法が組み合わさったものと考えることもできるが、(52)(53)のような例は、それでは説明できない。ここでは、こういう形もあることを指摘するにとどめる。

7．非過去形

朝鮮語の非過去形は、通常現在または未来の出来事について用いられるが、少数ながら、過去の出来事について使われることがある。非過去形が過去の出来事を表す場合については、伊藤(1989)において豊富な用例とともに詳しい分析がなされている。ここでは、伊藤(1989)の分類に沿って筆者が収集した用例を挙げて

おく。なお、用例が少ないものについては、伊藤(1989)に挙げられた用例を引用した。

①詠嘆的なもの

(54)「내가 눈치없이 들린 것 아냐?」

「立ち寄ったりして気が利かなかったかな。」

「시시한　　소리　하네.」〔伊藤(1989)の(106)〕

sisiha-n　sori　ha-nəi

「つまらない こと　言うのね。」

②反問

(55)「어서　이리　좀　누워, 피곤해　보여.」

「早くここにちょっと横になりなさい、疲れた感じだよ。」

「누워　있으려면　　우리집에　　있었지

nu'wə 'iss-'ɯryə-myən　'urijib-'əi 'iss-'əss-ji

「横になっていようと思えば 家に　　いた、

여긴　　뭣하러　　와[오아].」〔천〕

'yəgi-n　mwəsha-rə 'wa['o-'a]

ここに　何しに　　来る。　」

③聞き返し

(56)「당신　지갑　찾았어요.」「뭐　지갑을　　찾아?」〔양〕

daŋsin jigab caj-'ass-'ə'yo　mwə　jigab-'ɯr caj-'a

「あなた 財布　見つけました。」「何、財布を　見つける（見つけた）。」

(56)のような、聞き返しの文では、対応する日本語はタ形になる。この辺も、朝鮮語と日本語の異なる点である。

④歴史的現在

過去の出来事を述べるなかで非過去形の文が混じることがある。伊藤(1989)に

は述べられていないが、歴史的現在の用法として挙げておく。(57)は、他の文は었'əss形が使われているのに、最後の文で非過去形が使われている。

(57)「이 아까씨 성격 어땠어요?」「너무 온순하고 말이 없었죠.

「この娘の性格はどうでした。」「とてもおとなしくて無口でしたよ。

부장님이 좀 야단을 쳐 눈물을 줄줄 흘렸구요. 게다가 나도 봤는데

部長がちょっと叱ると涙をぼろぼろ流して。　その上私も見たんですが

요즘 뭐 분명히 안 좋은 일이 있었던 것 같습니다.

最近何か確かによくないことがあったようです。

근무시간에도　멍해　가지고　다른　생각에　빠져　있기

gɯnmusigan-'əi-do məŋhai gaji-go darɯ-n saiŋgag-'əi bbajyə 'iss-gi

勤務時間にも　ぼうっとして　物思いに　ふけっているのが

일쑤고　웃음기가　하나도　없어요.」〔코〕

'irssu-go　'us'ɯmgi-ga hana-do 'əbs-'ə'yo

しょっちゅうで 笑いが　一つも　ありません（ありませんでした）。

以上、①～④の用例は、いずれも話者が出来事の時間より出来事の内容自体に注目している例である。また、いずれの例も話者の感情・評価を含む点で共通している。これらの例は、非過去形の用法のなかでもモダリティーと関係が深いものである。

おわりに

本稿では、朝鮮語の過去の出来事を表す表現について述べてきた。朝鮮語においては、用言の形態がテンポラリティーを決定する主たる要素であり、今回は用言の形態に焦点を絞って述べた。その用言の形態のうち、過去の出来事を表すときもっとも中心となるのは었'əss形である。他の었었'əss'əss形、더də形などの形は、過去の出来事のうち、現在との隔たりや直接体験など、特にある要素を強調したいときに用いられる。つまり、過去の出来事を表す表現に限るならば、었'əss形は基本的に無標、他の形は有標ということになろう。今回は、考察の範囲が広いため、かなり粗い分析になった。今後は形態ごとに綿密な分析作業が必要

だろう。また、会話文以外の場合、連体修飾節の場合はどうなるかなど、今後研究すべき課題は多い。

＜注＞

1）工藤(1992a)は、科研プログラムの参加者による研究会の配布資料で未発表であるが、これを一部改稿した論文が、本報告書に掲載されている。

2）連体修飾節での用言の形態、およびその用法については、菅野(1986)に述べられている。

3）存在詞とは、動詞と形容詞の中間的な性格を持つもので、具体的な語としては있'iss-（ある、いる）、없'əbs-（ない、いない）がある。指定詞は名詞（句）と結び付いて述語となるもので、活用が他の用言と一部異なるため、独立した品詞として取り立てられる。具体的な語としては、-이'i-（～だ）、아니'ani-（～でない）がある。なお、研究者によっては、存在詞あるいは指定詞を認めない人もいる。

4）ハングルのローマ字表記は、河野(1979)の11ページの表によっている。

5）Ⅰ、Ⅱのような区別は、日本語のタ形の用法においてもなされている。日本語では、Ⅰ、Ⅱを区別する方法として否定の答え方の例が挙げられるが、本文の(6)(7)のように、朝鮮語では否定の答えにどちらも同じ形態（었'əss形）が使われる。

6）더də形をめぐる議論については、김차균(1980)、任洪彬(1982)などを参照のこと。

7）工藤(1992b)の場合も、一部改稿した論文が、本報告書に掲載されている。

＜資料出典＞

〔客〕「客地」황석영『客地』創作과 批評社 1974

〔꿈〕「꿈꾸는 자의 羅城」윤흥길『꿈꾸는 자의 羅城』文學과 知性社 1987

〔담〕「담배 피울 일」김정수『'90방송작가作品選』한국방송작가협회編 第三企劃 1991

〔모〕「모든 남자는 여자를 훔쳐본다」김종달『'91방송작가作品選』한국

방송작가협회編　第三企劃 1991

〔霧〕「霧津紀行」김승옥 『해방40년의 문학1 소설』권영민編　民音社 1985

〔森〕「森浦 가는 길」황석영 『客地』創作과 批評社 1974

〔壓〕「壓殺」김원일 『第三世代韓國文學6 金源一』삼성출판사 1983

〔양〕「양심 탐지기」김 남 『'91방송작가作品選』한국방송작가협회編　第三企劃 1991

〔엄〕「엄마 선물도 있어요」최성실 『'91방송작가作品選』한국방송작가협회編　第三企劃 1991

〔옹〕「옹 이」양인자 『'91방송작가作品選』한국방송작가협회編　第三企劃 1991

〔우〕「우리들의 일그러진 英雄」이문열 『九老아리랑』文學과 知性社 1987

〔이〕「이십 년 전」서영명 『'91방송작가作品選』한국방송작가협회編　第三企劃 1991

〔人〕『人間市場 1』김홍신 행림출판 1981

〔잘〕「잘못은 神에게도 있다」조세희 『난장이가 쏘아올린 작은 공』文學과 知性社 1978

〔천〕「천안（天安） 할머니」박정란 『'91방송작가作品選』한국방송작가협회編　第三企劃 1991

〔코〕「코스모스 필무렵」김 남 『'90방송작가作品選』한국방송작가협회編　第三企劃 1991

＜参考文献＞

伊藤英人(1989)「現代朝鮮語動詞の非過去テンス形式の用法について」『朝鮮学報』131　朝鮮学会

〃　(1990)「現代朝鮮語動詞の過去テンス形式の用法について(1) ― 했다形について ― 」『朝鮮学報』137　朝鮮学会

梅田博之・村崎恭子(1982)「テンス・アスペクト　現代朝鮮語」『講座日本語学11　外国語との対照Ⅱ』明治書院

生越直樹(1991)「韓国人日本語学習者のテンス・アスペクトに関する誤用について」『現代日本語のテンス・アスペクト・ヴォイスについての総合的研究』科

学研究費報告書
菅野裕臣(1986)「朝鮮語のテンスとアスペクト」『学習院大学言語共同研究所紀要』9
工藤真由美(1989)「現代日本語のパーフェクトをめぐって」『ことばの科学』3 むぎ書房
〃 (1992a)「テンスとテンポラリティー」科学研究費研究会配付プリント
〃 (1992b)「会話文におけるテンポラリティー －いわゆる歴史的現在用法を中心に－」科学研究費研究会配付プリント
河野六郎(1979)『河野六郎著作集1』平凡社
鈴木重幸(1979)「現代日本語の動詞のテンス ── 終止的な述語につかわれた完成相の叙述法断定のばあい ── 」『言語の研究』言語学研究会編 むぎ書房
寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版
浜之上幸(1991)「現代朝鮮語のアスペクト的クラス」『朝鮮学報』138 朝鮮学会
高永根(1990)「時制」『國語研究 어디까지 왔나』서울大學校大學院國語研究會編 東亞出版社 ソウル
김차균(1980)「국어 시제 형태소의 의미」『한글』169 한글학회 ソウル
南基心(1978)『國語文法의 時制問題에 關한 研究』塔出版社 ソウル
徐正洙(1976)「국어 시상형태의 의미분석 연구」『문법연구』3 문법연구회 ソウル
李翊燮・任洪彬(1983)『國語文法論』學研社 ソウル
任洪彬(1982)「先語末 {더} 와 斷絶의 樣相」『冠嶽語文研究』7 서울大學校國語國文科 ソウル
한현종(1990)「현대국어의 시제체계의 수립과 그 제약조건」『國語研究』99 國語研究會 ソウル